

教皇ヨハネ・パウロ二世のカテケージス：贖いと罪シリーズ

《罪は創造された世界を醜くする》

贖いの秘義と罪

三位にして一体、摂理の主・創造主、宇宙の父にして主である神についてのカテケージスの後に、救い主としての神についてのシリーズを始めましょう。

ところで、このカテケージスの基礎として信仰宣言があります。特に最古といわれる使徒信経や、ニケア・コンスタンチノーブル信経を掲げることができるでしょう。これらの信経は有名でよく用いられており、前者はキリスト信者の祈りの中で、後者は典礼文の中で使われているものです。両信経ともに、内容は似通った配列をもち、全能の父、天と地の全ての見えるものと見えないものの造り主である神について語る箇条に始まり、イエズス・キリストについて語る箇条へと続きます。

使徒信経は「われらの主、御独り子イエズス・キリスト、すなわち聖霊によりて宿り、童貞マリアより生まれ…」と簡潔に述べ、ニケア・コンスタンチノーブル信経は、神の御子キリストの神性を信じる宣言を「よろず世の先に父より生まれ、…造られずして生まれ、父と一体なり」と唱えます。つづく一節はみことばの受肉の秘義に移り「われら人類のため、われらの救いのために天よりくだり、聖霊によりて、おとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり」と詳しく述べています。両信経は共にイエズス・キリストの過越の秘義の成立を示し、裁きのための再臨を告げ知らせています。

続いて信経は、聖霊を信じることを宣言します。したがって、両信経は本質的に三位一体（御父と御子と聖霊）を中心に展開する構成になっていることを強調しなければなりません。と同時に、両信経ともに、至聖三位一体の神の「外に向かう」活動を強調しています。最初に（創造主としての御父による）創造の秘義について、次に（贖い主としての御子による）贖いの秘義、そして（聖化する聖霊による）聖化の秘義について述べています。

創造された全宇宙

こうして私たちも信経にしたがって、創造の秘義—もっと詳しくいえば全てのものの創造主である神について一の一連のカテケージスの後、今度は贖いの秘義、つまり人間と世界の贖い主としての神に関するカテケージスに進もうと思います。そしてこれは、イエズス・キリストについてのカテケージスになるでしょう。なぜなら、贖いのみわざは（創造のみわざと同様に）一にして三位なる神に属するものですが、私たちを救うために人となられた神の御子イエズス・キリストによってもたらされたものだからです。

贖いの秘義に関して、キリスト論が人類学と歴史学の中に見出されることに目をみはらされます。それというのも、御子は御父と同じ神でありながら、聖霊の働きによって人間となり、おとめマリアから生まれ、創造された全宇宙の中で、人類の歴史に入ってこられ

たからです。御子は「われら人類のため」「われらの救いのために」人間にられました。信経では託身の秘義を贖いの一部分としています。したがって啓示と教会の信仰とによれば、託身の秘義は救いの（救済論的）意味を持っているのです。

歴史の舞台における救いをもたらす託身の秘義について述べる時、信経は悪という現実、第一に「罪という悪」について述べることになります。というのは、救いは悪よりの解放だけを意味するのではなく、もっと広義にキリストが人間にもたらされた聖なる生命の豊かさを含むものであるとはいえ、何よりもまず、悪からの解放、特に罪よりの解放を意味しているからです。啓示によれば、罪は主要な根本的な悪です。すでに創造のみわざの中で、とりわけ創造主の似姿に造られた理性ある自由な存在の創造において啓示されているように、罪は神の聖旨を、神の真理と神性を、父親らしい神の慈愛を拒絶することです。また、被造物の存在と生命のために神の定められた目的を、理性を持つ人間が自由意志で拒絶するという事は、まさに神の似姿である人間が神に逆らうということです。罪は造られた善きものを醜く歪めてしまいます。

贖いの秘義はその根源において、人間の罪という現実と結びついています。キリストのうちキリストによって神が救いを成し遂げられたそのイエズス・キリストについて語る信経を説明しようとすれば、当然ながら罪というテーマに直面することになります。罪は、神が造られた世界に広く隠れて存在します。罪は人間の中に、造られたものの中にある全ての悪の根底にあります。このように考えてのみ、神の御子が、「われら人類のため」「われらの救いのために」人間となられたという啓示によってもたらされた事実の意味を余すところなく理解できるでしょう。救いの歴史は、神によって創られた人類の歴史における罪の存在を事実上前提としています。そして神の啓示が語る救いとは、何よりもまず第一に、罪という悪から解放することです。われら人類のため、またわれらの救いのために天よりくだった—これが、キリスト教救済論の中心となる真理なのです。あらゆる啓示の中で救いについての真理が中心であることを考えるならば、罪に関する真理もまた、キリスト教信仰の核心にあるということに目を向けねばなりません。「罪」と「贖い」は救いの歴史の中で相関関係にある言葉なのです。従って、信経の中で宣言するイエズス・キリストによってなされた贖いのみわざについての真理を本当に正しく理解するために、まず最初に罪に関する真理を考察しなければなりません。このカテケージスで何よりも罪について述べるのは、啓示と信仰の関係から見て、まことに筋の通った順序であるといえるでしょう。

第一バチカン公会議では「神は自分が創ったすべてのものを摂理によって保ち治める」と教え、知恵の書から「この世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてのものを巧みに司る」と引用しています。（知恵 8・1 参照、『カトリック教会文書資料集』 DS 3003）

この公会議では、その力強い御手と御父の優しさをもって、御自身が保ち導かれる事物に対する普遍的な神の配慮を認めた上で、神の摂理には理性のある自由な人間が創造のみわざの中へと導き入れる全てのものが、特別な方法で含まれているとはっきり述べています。すなわち、神の聖旨に従うことも逆らうこともできる人間の行為も、摂理のうちにあるということであり、当然ながらそこには罪も含まれていることがわかるでしょう。

このように神の摂理に関する真理のおかげで、罪そのものを正しく考察し理解することができます。摂理を理解して始めて罪の姿がはっきりと見えてくるのです。罪に関するカテージスの冒頭で次の点を述べておきます。信経はこのテーマについて少ししか触れていませんが、この事実こそ罪を贖いの秘義（救済論）の中で吟味するようにと示唆しているのは明らかです。創造に関する真理、さらには神の摂理に関する真理が、（神の無限の慈しみの啓示のおかげで）的確な言葉を使って明らかに、悪の問題、特に罪の問題を見せてくれるのであれば、贖いの真理を理解することによって、「罪が増したところにはそれ以上に恩寵があふれるばかりのものとなった」と言えるようになるはずです。（ローマ5・20）なぜなら、そうしてこそ正義と慈しみの神における和解の秘義をよりよく理解することができるからです。ところで、神の正義と慈しみは神の善性の二つの面です。

したがって罪という現実、贖いの光の中で神、つまり愛である神の神秘についての知識を、より一層深める好機になるといえるでしょう。

こうして信仰は、様々な哲学や文学、偉大な宗教との注意深い対話を始めます。これらのものはしばしば悪と罪の根源を話題にし、贖いの光を求めています。このような共通の基盤に立つてこそ、キリスト教信仰は全ての啓示の真理と恩寵を人々の善のためにもたらすことができるのです。

《罪——神の賜の濫用》

信経は罪について多くを語りませんが、聖書では「罪」という語とその概念について頻繁に触れています。この事実は、聖書が神の書であり神についての書であると同時に、人間についての書であることを証明しています。それは、罪が人間と人間の歴史に属するものだからです。罪をわざと見落とししたり、このわかりにくい実体を他の名前で呼んだり、啓蒙主義とか世俗主義の影響の下で起ったように別の解釈を与えたりしても、役に立たないことでしょう。罪という現実を認めるときこそ、人間と神との間の深遠な絆を認めることができるのです。なぜなら、罪という悪は人間の生活と歴史の中に絶えず存在するにも拘わらず、この人間と神との関係の外では現れないものだからです。罪が知られず、認められず、罪の本質は神を否定し神に抵抗することだと認めなければ、罪は人間にとって隠れた致命的な現実として大変な害を及ぼします。これを選択する主体であり行為者であるのは当然のことながら個々の人間です。人は自分の良心の命令をはっきりと神に言及することなしに拒絶することができます。けれども、人間と神との関係を背景として考えたときにこそ、その馬鹿げた悪の行為が実は神を拒否することだということが明らかになるのです。

こういうわけで、聖書では最初の罪は創造の秘義に関連して描かれています。言い換えると、人間の歴史の始まりに犯された罪は創造、つまり存在という神のすばらしい賜を背景にして示されています。目に見える世界を背景として、人間はその存在を神の賜として、神の御姿に似たもの、知性と意志を与えられた理性のある存在として、授かりました。神の創造の賜ということを考えるなら、私たちは「最初の」罪の本質をもっともよく理解することができるでしょう。つまり与えられた能力を誤用することによってなされた、人間

の自由な選択がそれです。

私たちがここで話している歴史の始まりは、科学理論として描かれたものではなく、聖書の頁に現れる「始まり」についてです。聖書はこの「始まり」の中で、人類が経験する倫理的悪の起源の謎を説き明かして、これを罪だと教えます。

神との友愛

創世の書の創造のみわざについて語る最初の部分では、創られた全てのものがもつ原初の「善性」特に「男と女」として神に創られた人間の「善性」が強調されています。（創世 1・1～28 この部分は 2・4～15 より年代的には後になるものです） 創造について述べる中に「神はこれを見てよしと思われた」と幾度も記してあります。（創世 1・12、18、21、25） が、最後に人間を創った後で「神はそのわざを見、非常によしと思われた」のでした。（創世 1・31） それというのも、これは神の似姿として創られた被造物、すなわち理性ある自由な存在の創造であったからです。理性ある自由なというこの言葉は、創造主の御計画にしたがってその存在に本来備わっているべき「善性」を示しています。

これは、人間の原初の汚れの無さ（無罪）、人間の原初の義（原始義）について教会が教える信仰の真理の基礎となるものです。創世の書には、人が神の御手から出て神と極めて親しい生き方をしていたことが描かれていますし、伝道の書にも「神は人間を正しいものとしてつくった」とあります。（創世 2・8～25 参照、伝道 7・29） またトリエント公会議が、人祖アダムは与えられていた聖性と義とを失ったと教えるとき罪を犯す前の人間が神の御前に「義」とされる全ての超自然的賜と共に成聖の恩寵を所有していたことを示しています。（『カトリック教会文書資料集』 DS

1511 罪についての教令） 以上すべてを要約すると、原初の人間は神と睦まじい関係にあったといえるでしょう。

聖書の光に照らしてみると、罪を犯す前の人間は原初の完全な状態にあったということが、創世の書におけるあの「楽園」のイメージを通して描かれています。この完全性の源は何かと尋ねるなら、それは成聖の恩寵によって何よりもまず神と睦まじい関係にあったこと、そして罪によって失ってしまった、神学で外自然的といわれる賜との二つであると言えるでしょう。この神の賜のおかげで、人間は自己の存在原理と親しく交わり、調和を保ち、自身の内的な落ち着きを得、それを保っていたのです。こうして自分が衰えることや死ぬことを思っただけで憂慮することなどありませんでした。神が最初から人間に与えられた世界全体を「支配する権能」は、まず最初に人間が自らを支配することとして実現しました。この自己支配と均衡の中で、人間は存在の「十全性」を持っていたのです。それは、人間がその全存在において無傷で完全であり、秩序を保っていたということです。なぜなら、感覚的快楽、地上の富をむやみに欲すること、理性の命令に逆らって自己を主張することなどに向かわせる三重の情欲を免れていましたから。

したがって、人間は他者との関係においても秩序を保っていました。

人間同志の最初の関係、幸せな親しい交わりにも秩序がありました。人間社会の最初の夫婦であり、最初の核でもある男と女、アダムとエバの関係のように。創世の書の簡潔な

文章はこの視点から非常に雄弁に語っているように思われます。「さて、男とその妻とは、ふたりとも裸であったが、はずかしいとは思わなかった。」（創世2・25）

啓示によってわかるように、神の似姿として創られた人間の中に、原初の義と完全性が存在したからといって、他の霊的存在と同様に自由を与えられた被造物としての人間が、最初の瞬間から自分の自由を試されることを免れていたというわけではありませんでした。啓示によれば、人間に存在の幸福をもたらす神との睦まじさのおかげで、罪を犯す前の人間が原初の義（原始義）の状態にあることを示すと同時に、人間のために予定されていた根本的なテストと、人間がそのテストに落第したことをも告げています。

このテストは、「善悪の知識の木」の実を食べてはいけない、という形で次のように描かれています。「主なる神は人に命じておおせられた、『園のすべての木の実を自由に食べてもよい。だが善悪の知識の木の実を食べてはいけない。それを食べたら、きっと死なねばならなくなるからである』」と。（創世2・16～17）

ここにおいて創造主は最初から、理性ある自由な人間に対して契約の神として御自分を示しておられることがわかります。契約の神は、友愛と喜びの神であると同時に善の源泉としての神でもあり、したがって倫理的意味での善と悪の区別の源でもあるのです。善悪の知識の木は、一被造物である人間が、認め、尊重すべき絶対的な限度を象徴的に思い出させてくれます。つまり、人間は創造主に従属するものであること、そして創造主が創られた世界の秩序、存在の本質的な秩序のために制定された法に従わねばならぬこと。したがって、人間は自由の行使を規制する倫理基準に従うべきものでもあります。ですから最初のテストは、自由な状態におけるその人の自由意志を試しているのです。人間は、その行為の中で創造の基本的秩序を確認するのでしょうか。また、自分自身が創られたものであるという真理、すなわち一方に神の似姿としての己れに属している尊厳、一方に被造物ゆえにもつ自身の限界という真理をも認識するのでしょうか。

不幸にもテストの結果は落第でした。啓示はこのことを告げていますが、この悲しい知らせは贖いの真理と関連して示されました。私たちは、慈悲深き創造主である主を、信頼をこめてあおぎ見ることができるのです。

《原罪は根本的に人類を変えた》

創造と賜の授与、これによって神は人間を聖性と原初の義の状態（もともとの聖性の状態）に置かれたのですが、こういう背景の中で創世の書の最初の罪の記述（第3章）を読むと、その意味が非常にわかりやすくなります。「善悪の知識の木の実」を食べてはいけないという神の命令への背反を中心としているこの記事は、古代のテキストの性格、特にその文学類型を考慮に入れて説明されるべきです。しかし聖書の最初の書を学ぶにあたっては、この学問的な必要条件を心に留めておく一方で、罪についての詳細な記事から一つの確かな要素が明らかになることを否定することはできません。それは原始の出来事、つまり啓示によれば人間の歴史の始まりに起こった一つの事実のことです。まさにこの理由のために、人間と神との関係、そしてその結果としての人間自身の内的「状況」にとって、また人間相互の関係、一般に人間とこの世との関係にとってもう一つのある確かな要素、

あの出来事についての根本的で疑う余地の無い暗示が含まれています。

記述の下に隠れた真に重要な事実は、倫理的性質のものであり、人間の靈魂の根底に銘記されています。それは人間の境遇に根本的な変化を起します。人間は原初の義の状態から追い払われて、自分が罪深い状態にあることに気づくのです。罪が内在する状態であり、それは罪への傾きとなって現れます。この瞬間から、人類の歴史全体がこの状態にあえぐことになるのです。実際人祖（男と女）は自分自身のためばかりでなく、人間家族の始祖として、全ての子孫のためにも神から成聖の恩寵を受けていました。従って、人間を神と相容れない状態にした罪を通して、人祖の恩寵の喪失（神の不興を蒙ること）は、子孫にまでも及ぶこととなったのです。啓示に基づいた教会の教えによれば、人祖から受け継いだ原罪の本質は、人間の本性に加えられたこの恩寵の喪失にあります。

本質的な問題

創世の書の第 3 章に描かれた最初の罪についての記述を分析すれば、この遺産の性質を一層よく理解できるでしょう。この発端は、蛇の姿で現れた「試みるもの」と女との会話であり、これは極めて新しい重要な出来事です。創世の書はこの時まで男と女はさておき、創造された世界の中に理性を持つ自由な存在があることについては何も触れていません。第 1、2 章における創造の記事は「目に見えるもの」の世界にとどまっています。けれども、たとえこの会話の間は目に見える姿で示されていても、「試みるもの」は「目に見えないもの」・純粋に靈的なものの世界に属します。聖書でのこの悪魔（悪霊）の初めての出現は、新旧両約聖書の中でこの主題を扱っている全ての文脈を考慮しつつ深く考えられねばなりません。黙示録（聖書の一番最後の書）には雄弁に描かれています。「大きな竜、すなわち悪魔またはサタンと呼ばれ全世界を迷わすあの昔の蛇は（創世の書第 3 章を引用していることは明らかです）、地上に倒された」と。（黙示録 12・9）なぜなら竜は「全世界を惑わし」、また他の時には「うその父」とも呼ばれているからです。（ヨハネ 8・44）

創世の書第 3 章で読む歴史の始まりに犯された人間の罪・最初の罪は、この蛇の影響を受けて起こりました。「昔の蛇」は、「神が園の中にあるすべての木の実を食べてはいけないと言われたのは、本当でしょうね？」と女をそそのかします。女は「園の中にある木の実を食べてもよいが、園のまん中にある木の実についてだけ、死なないためには、これを食べても、ふれてもいけないと神は言われました」と答えます。しかし蛇は女に言ったのです。「ちがう、あなたたちは死なない。それどころか、あなたたちがそれを食べたら、その目がひらかれて神のようになり、善と悪とを知るようになると、神は知っているのだ」と。（創世 3・1～5）

見たところ単純な形の下に隠されている人間の生命の本質的な問題を、このテキストの中から汲み取るのは難しいことではありません。ある一本の木の実を食べるか食べないか、そのこと自体は関係ないことのように見えるかもしれませんが、「善悪の知識」の木となると、それは根本的な問題に関わる人間の生命の第一原理を表すものです。悪魔はこのことを大変よく知っています。「あなたたちがそれを食べたら…神のようになり、善と悪と

を知るようになる」と言っている通りです。この木は、人間であれまたどんな被造物であれ、たとえそれがどんなに完全であったとしても、被造物に課せられた克服できない限界を示しています。被造物は常に単なる被造物にすぎず、神ではないのです。人間は、神のように「善と悪を知ること」も「神のように」なりたいと要求することも決してできないのです。神御一人だけが全存在の源であり、神だけが絶対の真理であり善です。神のみが、善と悪を測る基準であり、善と悪を区別する御方なのです。神のみが永遠の立法者であり、造られた世界の全ての法、特に自然法は、この立法者に由来します。理性的な被造物である人間はこの法をわきまえ、この法に導かれて行動しなければなりません。創造主に逆らってまでも創造主から独立し、何が善で、何が悪であるかを自分で決定したり、自ら道徳法を制定することなどできるはずはありません。自分こそ倫理的秩序の支配者だと主張して、神の座に着くことなど、人間であれ他のいかなる被造物であれできることではないのです。このような要求は、被造物自身の根本的な（存在論的な）構造に反するものだからです。

見たところさして意味があるとは思えぬ創世の書の叙述ですが、そこには人間の根本的な問題が被造物としての人間の状態と密接に結びついていることが明らかにされています。理性を持つ存在である人間は、人間の存在の真理でもあるこの「第一の真理」の導きに従わなければなりません。真理に取って代わりたい、真理と同等になりたいなどと主張することは、人間にはできません。万一、この原理に異議を唱えるなら、創造主に対する被造物の「義」の土台は、人間の行動の根源までも揺るがすことでしょう。「嘘の父」誘惑者（悪魔）は、神との真の関係を疑わせることによって、原初の義の状態（もともとの聖性）の状態をも疑問に付させるのです。人間は悪魔に屈伏し、個人的に罪を犯し（自罪）、人間の本性に原罪の状態を生じさせます。

聖書の説明からわかるように、人間の罪はもともと人間の心の中（や良心）から生じるものではありません。人間が自らすすんで罪を犯したのではなかったのです。ある意味では、人間の罪は目に見えない存在の世界ですでに起っていた罪の結果であるといえるでしょう。悪魔「昔の蛇」はこの目に見えない世界に属するものです。前もって知識と自由を与えられていたこれらの存在は、純粹に靈的な己れの本性にふさわしい選択ができるよう「試された」のでした。彼らの中には「疑い」が生じました。そして、それは創世の書第3章に詳しく述べられている悪魔による人祖の誘惑という形で再び現れます。全ての被造物、特に靈的被造物に与えられた善の唯一の源泉である創造主を、目に見えぬ存在であるものたちはすでに疑い、そして非難していたのです。全被造物が創造主に従属することを要求する存在の真理に異議を唱えたのです。この真理は、原初の高慢に取って代えられました。その高慢のゆえに、彼らは自分自身の精神を自由の原理および基準にしようとしたのです。彼らは「神のように善と悪を知る」力を要求した最初の存在でした。そして彼らは、被造物としての自分たちの存在の要求に従って「神の内に」あることを選ぶ代わりに、神の上に立つ方を選んでしまったのです。誰が神のようになれましょう。そして人間は、その誘惑者（悪魔）の暗示に乗せられて、反抗的な靈（悪霊たち）の奴隷となり、共犯者となりました。

創世の書の第 3 章によれば、人祖が「善悪の知識の木」の傍で聞いた言葉には、被造物の自由意志の中で生じるあらゆる悪の攻撃が含まれています。そしてそれらは、全ての存在と全ての善の源である創造主、絶対に公平で真に父らしい愛である御方、本質からして与える意志である御方への反抗となるものなのです。この与えられた愛が、反抗と否認、拒絶に出遭いました。「神のように」なりたいと望む被造物の姿は、聖アウグスティヌスが「神をあなどるほどの自己愛」（『神国論』 XIV 28 PL 41, 436）と、非常に適切に表現している状態の具体的な現れです。これは、おそらく歴史の始まりにおけるあの罪についての概念を最も鋭く正確に説明するものでしょう。それは、悪魔の示唆に人間が従ったために起こったことでした。神を拒絶し、神を軽蔑し、神に関わるもの、神から出たものを何事も全て憎むことになったのです。

不幸なことに、これは歴史の曙に起こったただ一度きりの出来事ではなかったのです。本当にあの最初の罪の遺産としか思えぬような人生の事実や、行ないや言葉や状況に何とたびたび出会うことでしょう。

創世の書は、あの罪をサタンとの関係の中に位置づけています。またこの「昔の蛇」についての真理は、後になって聖書の中の他の数々の箇所を確認されています。

人間の罪は、こうした背景の中でどのように示されているのでしょうか？ 創世の書第 3 章には次のように書かれています。「すると女は、なるほどその木（の実）が食べてもおいしく、見ても美しく、知識を得るために食べるねうちがあると思うようになり、その実をとって食べた。そして一緒にいた男にも差しだすと、男も食べた。」（創世 3・6）

聖書独特の方法で詳しくなされたこの叙述は、何を示そうとしているのでしょうか。それは、「この木の実を食べれば、知識を手に入れることができる」という悪魔の保証にそそのかされて、人祖が創造主の御意志に逆らって行動したことを証明しているのです。けれども人間が「嘘の父」の言葉の中に含まれている神の否定と憎しみの全てを、何から何まで受け入れたのだとは思えません。そうではなくて、善悪を知れば人間も「神のように」なりうると考え、創造主の禁令に反して、創られたもの（木の実）を利用する提案を受け入れた、ということです。

聖パウロによれば人間の最初の罪は、特に神への不従順にあります。（ローマ 5・19 参照） 創世の書第 3 章を分析し、この驚くほど深遠なテキストを深く考えると、あの「不従順」がどのようにして起こり得たか、またそれが人間の意志の中でどんな方向に発展していくことができたのかがわかります。創世の書第 3 章に描かれた「最初の」罪は、ある意味で人間の犯し得るあらゆる罪の「原型」を含んでいると言えます。

《人間の歴史における罪の普遍性》

先のカテケジスの内容は第二バチカン公会議の言葉に要約することができるでしょう。「人間は神によって義の中におかれたが、悪霊に誘われて歴史の始めから自由を乱用し、神に対立し自分の完成を神のほかに求めた。」（『現代世界憲章』 13） これこそ創世の書第 3 章でなされた人類の歴史における最初の罪の本質を突く分析です。

これは人祖が犯した罪でしたが、この罪とつながった罪深い状態は子孫に伝わり、原罪

と呼ばれています。これはどういう意味でしょうか。

原罪という語は聖書の中には一度も出てきません。けれども創世の書第 3 章の物語を背景にして、創世の書のその後の章やその他の書の中でも、アダムの罪の結果として、人類全体に及ぶ普遍的な伝染病のように罪が世界中に「侵入した」様子が描かれています。

創世の書第 4 章には、すでにアダムとエバの二人の息子の間に起こったこと、カインが弟アベルを殺した次第が描かれています。(創世 4・3～15 参照) そして第 6 章では犯された罪によって全世界が墮落したくだりへと続きます。「人間の悪意が地上にはびこり、心の中にやどしたどんな考えも、いつも悪にばかり傾いているのを見られた主」は「世をながめられると、世は墮落していた。全ての人が地上で墮落した生活をしていたからである。」(創世 6・5、12) これに関連して創世の書はためらわずに述べています。「主は地上に人間を創ったことを後悔し、心のうちで嘆かれた。」(同 6・6) 同様のことが、同じ書の中で罪によって全世界が墮落した結果であるノアの洪水の話の中に見られます。

(同 7・9) 創世の書はバベルの塔の建設のことも述べています。(同 11・1～9 参照) これらのことは、どんなしるしも、またどんなに世界的な契約であっても、根源が神になれば人間に一致をもたらすことができない、ということを示しています。この点に関して歴史の歩みの中で注意すべきことは、罪がはっきりと神に「逆らう」ことを指向する行為であるばかりでなく、時にはまるで神が不在であるかのように「神を離れて気ままに」行動しようとする企てでもあるということです。それは神を無視するための、神無しに行なうための、生意気にも神の代わりに人間の力を称揚するための口実なのです。この意味では「バベルの塔」は現代の人々にとっても警告として役に立ちます。そういうわけで私は使徒的勧告『和解と悔悛』の中でもこのことに言及したのです。

人類の罪の深さの証拠は創世の書ですでに明らかにされていますが、聖書の他の部分にも様々な方法で描かれています。どの場合をとってみても、罪深さの普遍的な条件は人間が神に背を向けるという事実と関係があります。聖パウロは書簡の中で、この問題について特に雄弁に語っています。「彼らは深く神を知ろうとしなかったので、神は彼らのよこしまな心のままに不当なことを行なうにまかせられた。彼らは、すべての不正、罪悪、私通、貪欲、悪意、憎悪、殺害、争乱、狡猾、悪念に満ちる者であり、そしる者、悪口する者、高ぶる者、自慢する者、悪事に巧みな者、親に逆らう者、愚かな者、不誠実な者、情けのない者、あわれみのない者である。…彼らは神の真理を偽りに変え、創造主の代わりに被造物を拝みそれを尊んだ。神は代々に賛美されますように。アメン。神は彼らを恥ずべき欲に打ちまかせられた。すなわち、女は自然の関係を自然にもとった関係に変え、男もまた女との自然の関係を捨てて互いに情欲を燃やし、男は男と汚らわしいことを行なうてその迷いに値する報いを身に受けた。…これらを行なう者は死にあたるという神の定めを知りながら、彼らはそれを行なうばかりでなくそれを行なう人々に賛成する。」(ローマ 1・28～31、25～27、32)

生活を根本から改める

聖パウロが手紙を認め、使徒たちと共に働いていた教会の草創期に書かれたこの手紙は、

当時の「罪深い状況」を描いた気品高く的確な記事であると言えるでしょう。確かに、評価されるべき価値あるものも当時の世界には多くあったとは言え、罪が様々な形で浸透し、世界は非常に汚染されていました。しかしキリスト教信仰は、勇気と剛毅をもって大胆にこの状況に立ち向かい、信者たちの生活の根本的な変更と回心という実りを首尾よく手に入れたのでした。このことは後に、キリスト教の影響下に形成され発展した文化文明を特徴づけるしるしとなりました。今日でも、ある国々では特に、人口の大部分がこの伝統を享受しています。

第二バチカン公会議の『現代世界憲章』に聖パウロの書簡とよく似た記述が見られるという事実は、私たちが生きているこの現代の徴候を示しています。「あらゆる種類の殺人・集団殺害・墮胎・安楽死・自殺などすべて生命そのものに反すること、障害・肉体的および精神的拷問・心理的強制などすべて人間（ペルソナ）の十全性を侵すこと、人間以下の生活条件・不法監禁・流刑・どれい的使役・売春・人身売買などすべて人間の尊厳に反すること、また労働者を自由と責任のある人間（ペルソナ）としてではなく、単なる収益の道具として扱うような悪い労働条件など、これらのすべてと、これに類することはまことに破廉恥なことである。それは文明を毒し、そのような危害を受ける者よりは、そのようなことを行なう者を汚すものであって、創造主に対するひどい侮辱である。」（『現代世界憲章』27）

いまはこの公会議のテキストが、教会の司牧者たち、カトリック・非カトリックの学者や教師たちによる他の沢山の告発の中で、今日の世界における「罪の状況」の記述をどの程度まで説明しているかを確証するために、歴史的分析や統計をとっているべき時ではありません。量的なことはさておき、こうした数々の事実の存在が、あの人間性の「伝染病」の悲しくも恐ろしい証拠となっているのは確かです。それは次のカテケージスで話すつもりですが、聖書にも記されており、教会の教導職も教えていることなのです。

さて、さしあたって二つのことがわかるでしょう。その第一は、神の啓示とその真正の説明者である教会の教導職が、絶えず一貫して人間の歴史における罪の現存と普遍性について語っていること、第二は、代々続いて繰り返されるこの罪深い状況が、個人生活・社会生活において顕著である倫理的な病という重大な現象を通して、歴史の「外側」からでさえあらわであるということです。人間の「心の内側」に目を向ければ、おそらくそれは一層よく認識でき、一層著しいことがわかるでしょう。

第二バチカン公会議の文書の他の箇所も、次のように述べています。「神の啓示によって知らされるこれらのことは、人間の経験と一致する。すなわち、人間は自分の内心を振り返ってみれば、自分が悪に傾いており、多種多様の悪の中に沈んでいることを発見する。それらの悪が、人間を創った善なる神から来ることはできない。人間はしばしば神を自分の根源として認めることを拒否し、また自分の究極目的への当然の秩序ならびに自分自身と他人と全被造物とに対する調和を乱した。」（同 13）

現代の教会の教導職のこうした声明の数々は、歴史的・精神的経験という事実を含んでいるばかりではありません。それらは、すでに分析した創世の書第 3 章すなわち人類史上最初の罪を証言する章句を始めとして、聖書の中で幾度も繰り返される教を忠実に反映

したものなのです。

ここでは、激しく苦しむヨブの問いを思い出すだけにとどめましょう。「人は神のみ前に正しくありえようか？ 人はつくり主のみ前に、清くありえようか？」（ヨブ 4・17）「清い、というその人間は何だろう？ 女から生まれたものが、正しくあろうか？」（同 15・14）他にも同じような問いが格言の書にあります。「私の良心はきよい、私は罪がないと言える人があろうか？」（格言 20・9）

詩篇の中にも同じ叫びが響きます。「（おお神よ）あなたのしもべを裁かれるな、生きる者は誰も、み前に義とされぬ。」（詩篇 42・2）「罪人は胎にいる時から迷い、うそを語る者は、胎にいる時から道はずれた。」（同 57・4）「私は不義の中に生れ、母は罪のうちに私を身ごもった。」（同 50・7）

こうしたテキストの全てが、旧約聖書におけるこのような感情と思考の連綿とした存在を指摘しており、少なくとも全世界に広がった罪の状況についての難しい問題を提起しています。

罪の根源は人の心

聖書は人間の内面、良心・心の中に罪の根を捜すように私たちを急き立てています。このことは、人間は罪のうちに身ごもったといい、「神よ、私に清い心を作れ」と神に叫ぶ詩篇に表されていると言えるでしょう。（詩篇 50・12）人間の本性の中で「先天的」とも言えるような罪の普遍性とその遺伝性の双方が、聖書の中でしばしば述べられています。詩篇 13 では「みな迷い、みな腐りはてていた、よい事をする人はいない、一人もいない」と述べているのです。（詩篇 13・3）

「心のかたくなさ」についてのイエズスの話は聖書のこの部分を背景として理解できます。（マテオ 19・8 参照）聖パウロは、このかたくなさをおもに倫理的な弱さとして、むしろ善を行なう能力に欠けている状態として考え、次のように述べています。「私は肉体の人であって罪の下に売られた者である。私は自分のしていることがわからない。私は自分の望むことをせず、むしろ自分の憎むことをするからである。」「善を望むことは私の内にあるが、それを行なうことは私の内にない。」「善をしたいとき悪が私のそばにいる。」（ローマ 7・14～15、18、21）興味深いことにこうした言葉は、しばしば異教の詩人の言葉とよく似た響きをもっています。「私は善いものをみて、よいと認めるのだが、私がするのはいちばん悪いことなのだ。」（Quid Metamorph 7・20 参照）どちらの場合も（また非常に多くの霊的著作や文学全般においても）、人間の経験する悲しい現実がよく現れています。これらの事柄についてほのかな光を投げかけてくれるのは、原罪の啓示だけなのです。

特に、第二バチカン公会議が示した現代の教会の教えはこの啓示された真理を正確に反映して「この世界は…創造主の愛によって造られ保たれており、罪のどれい状態に陥った」（『現代世界憲章』2）と語ります。そしてまた「やみの権力に対する苦しい戦いは、人間の歴史全体に行きわたっている。それは世の初めから始まったものであって、主が言われるように「最後の日まで続く。人間はこの戦いに巻き込まれているので、善に着くために

は常に戦わねばならず、神の恩恵の助けと大きな努力なしには自己の統一を確立することもできない」と述べているのです。(同 37)

《原罪と教会の教え》

創世の書第 3 章に含まれた内容に従って、人間の歴史における最初の罪を分析し、罪の普遍性と遺伝性について啓示が教えることは他の機会に詳しく見ることができました。教会の教導職はこの真理を現在にいたるまで繰り返し提示しています。今日は第二バチカン公会議の文書、特に『現代世界憲章』と公会議後の『和解と悔悛』を参照しましょう。

この教えの典拠は何よりもまず第一に創世の書です。私たちはそこで、人間が悪魔に誘惑されて（「あなたたちがそれを食べれば…、神のようになり、善と悪を知るようになる」創世 3・5）、「自由を乱用し神に対立するものとなり、自分の完成を神のほかにも求めた」ことを知ります。（『現代世界憲章』13）すると、「ふたりの目がひらけ」（つまり、男と女の目がひらかれ）「裸でいるのがわかった」のです。（創世 3・7）その時、主なる神は男を呼んで、「どこに居るのか」と仰せられた。「裸なのでこわくなってはずかしく思い、隠れました」と男は言いました。（同 3・9～10）とても意味深長な答えです。人間は最初の義（原始義）の状態にあったとき、神の似姿に造られたもの、霊的肉体的存在として友情と信頼のうちに神と話すことができたのが、今やこの友情と契約という土台を失ってしまいました。人間は、神の生命にあずかる恩寵、神への従属と神との父子関係という最初の聖なる〈原始義〉の状態に属することができなくなり、そしてすぐに男と女の存在と振舞いの中に罪の現存を感じるようになりました。自分たちの罪と、罪人としての恥ずべき状態を思い知らされ、神を恐れしました。聖書のこの頁では、墮落後の人間の有様について、啓示の内容と心理分析が完全に一致しています。

罪の後に死が来た

新旧両約聖書からもう一つの真理が明らかになるのがわかるでしょう。すなわち人類史の中に罪が〈侵入〉してきたということです。罪は人間の共通の運命「母の胎」から引き継ぐ親譲りの遺産となりました。「母は罪のうちに私を身ごもった」と詩篇作者はその生活に根ざした苦しみの叫びを上げています。その苦しみの中で、悔い改めが神の慈愛を求める祈りに結びついています。一方パウロに目を向けると、彼はこの苦しみの経験にしばしば触れ、ローマ人への書簡の中で「みな罪の下にある」と理論的で簡潔な表現をこの真理に与えています。「それは全ての口を閉ざし、全世界を神の裁きに服させるためである。」（ローマ 3・19）「私たちもみな…本来は怒りの子であった。」（エフェソ 2・3）それらはみな、恩寵の助けなしに残された人間の本性、人祖の罪によって墮落した本性、したがって彼らの全ての子孫・後継ぎの状態を暗示していると、聖書学者たちは述べています。

受胎の瞬間に誰もが親から受け取る、あたかも先天的といえる罪の普遍性と遺伝性について聖書が述べるところを読むと、原罪についてのカトリックの教えをもっと直接的に吟味するよう招かれているように思えます。

最初の頃から教会の教えの中でそれとなく伝達されてきた原罪についての真理は、418年の第15回目のシノドスおよび529年のオランジェのシノドスにおける教導職の宣言となりました。それは主としてペラジウス派の誤謬に対するものでした。（『カトリック教会文書資料集』 DS 222-223, 371-372 参照） また、後の宗教改革の時代には、1546年のトリエント公会議によって厳かに宣言され、信仰箇条になりました。（同 DS 1510-1516 参照） トリエント公会議の原罪に関する教令はこの点を明確に表しています。そこではこの真理が信仰の対象であり、教会の教えの対象となっています。したがって、それがカトリックの教えの本質であるということから、次にこの教令に言及する必要があるでしょう。

人祖（教令では〈最初のアダム〉）は地上の楽園で（最初の義〈原始義〉と完全の状態において）、神の掟に背いて重大な罪を犯しました。人祖は犯した罪のために成聖の恩寵を失ったのです。同時に、初めから彼らの本質をなしていたとも言える聖性と義を失い、自らの上に神の怒りを招きました。

この罪の結果が死であったのです。創世の書にある主の御言葉を思い出すべきでしょう。

「善悪を知る木の実を食べてはならぬ。その実を食べたら、必ず死なねばならぬからである。」（創世 2・17） 罪の後、サタンはその支配を人間にまで拡げることができました。トリエントの公会議は「死の国の権力を持つ悪魔の勢力下に置かれることになった」と延べ、サタンの権力下にあることを〈奴隷の状態〉と言っています。（『カトリック教会文書資料集』 DS 1511 参照）

最初のドラマのこの面に立ち戻って、罪がもたらした「疎外」という要素を調べる必要があるでしょう。その際、注目すべきこと、それは、トリエントの教令が「アダムの罪」に言及して、人祖自身の個人的な罪（罪の源となったもとの罪 *peccatum originali originans* と称されるもの）であるとしながらも同時に、人類の歴史にもたらされたその恐ろしい結果（原罪の結果 *peccatum originale oroginatum*）であるとも、明記している点です。

現代文明が強く異議を唱えるのは特にこの第二の意味の原罪に関することです。つまり人祖の決意とは関係があっても、私たち一人ひとりの決意と関係のない、遺伝的な罪という考えを受け入れることができません。このような考えは個人中心の人間観や人間の主体性を重んじる要求に反すると言うのです。

けれども、原罪に関する教会の教えは現代人にとっても非常に大切なものです。この点に関する信仰の真理を拒絶した現代人は、日頃経験する悪の神秘的で悲観的な面が理解できず、理性に反する刹那的な楽天主義と希望皆無の徹底的な悲観主義との波にもてあそばれることになってしまうのです。

《全人類に及ぶ原罪の結果》

トリエント公会議は、原罪に関する教会の信仰をおごそかに述べています。今回は、原罪が人類に及ぼす影響について、公会議が何を教えているか考えてみましょう。

トリエントの教令はまず次のように述べています。アダムの罪は子孫に伝わった、つま

り人祖の子孫である全ての男と女、すでに神との友情を奪われた人間の本性を持つ彼らの後継ぎに伝わった、と。

トリエントの教令は、アダムの罪がアダム自身を墮落させたばかりでなく、全子孫をも墮落させたとはっきり述べています。（『カトリック教会文書資料集』 DS 1512 参照）アダムは、自分自身のみならず「私たち」にも、神から与えられていた原初の義と聖性とを喪失させました。

アダムは肉体の死と他の罰（罪の結果）ばかりか、靈魂の死である罪をも全人類に伝え残したのです。

ここで、トリエント公会議は聖パウロのローマ人への書簡を引用しています。すでに、カルタゴのシノドスがこの書簡を参照しており、その教えは繰り返されて教会内に広く行き渡っていました。

アダムの罪は出生によって伝わった

パウロの書簡は現代語訳で次のようになっています。「一人の人によって罪が世に入り、また罪によって死が世に入ってすべての人が罪を犯したので死がすべての人に及んだ。」（ローマ 5・12）ギリシャ語の原典では「彼においてすべての人が罪を犯した」とあり、旧ヴルガタ訳での表現は「（一人の男）においてすべての人が罪を犯した」となっています。しかし、ギリシャ人たちは初めからヴルガタ訳の「～において」とは、「何故なら」とか「～であるので」の意味であるとはっきり理解していました。そしてこの意味は、今日現代語訳でも一般に容認されています。けれども「彼において」という表現に解釈上の相違があったとしても、聖パウロのテキストの根本的な真理、すなわちアダムの罪（私たちの人祖の罪）が全ての人類に影響したということには変わりはありません。その上に、同じ書簡の中で使徒は「一人の人の不従順によって全ての人が罪人とせられた」「一人の罪によって有罪の判決がすべての人に及んだ」（ローマ 5・19、18）と書き、アダムの過ちを全人類の罪深い事態と結んでいるのです。

今、引用した聖パウロの言葉は教会の教導職も参照しており、全人類に対するアダムの罪の影響について私たちの信仰を啓発してくれるものです。また、カトリックの数々の注釈や神学者たちが、人間の起源についての科学的説明の価値を信仰の知恵で検討する時にも、この教えに常に導かれています。

特に神学者と科学者とのシンポジウムに対する教皇パウロ六世の言葉は確実な根拠があり、この問題に関する深い探求のための刺激となるでしょう。「現代の著述家たちの与えた原罪に対する説明が、皆様には真正なカトリックの教えとは強調できないものにみえるであろうことは明らかです。多祖説という立証されない前提から出発するこうした著述家たちは、このような悪のかたまりは罪から人類の中に出てきたこと、そしてその罪はまず第一に歴史の初めに存在した『最初の人間』アダムの不従順であったことを多かれ少なかれ否定しています。」（『使徒座公報』 AAS

LVIII 1966. 654)

トリエントの教令はもう一つの宣言を含んでいます。つまりアダムの罪は、悪い手本を

まねることによってではなく出生によってその子孫のすべてに伝えられるということです。教令は「このアダムの罪は起源が一つであり、模倣によってではなく、遺伝によって伝えられて、全ての人に一人ひとりに固有のものとして内在するものである」と述べています。（『カトリック教会文書資料集』 DS 1513）

従って、原罪は自然の出生の過程を経て伝わるものです。教会のこの確信は、公会議も言及している幼児洗礼の実践にも示されています。新生児は自罪を犯すことはできないけれども、教会の何世紀にもわたる伝統にしたがって、罪の赦しのために誕生後間もなく洗礼を受けるのです。教令は次のように述べています。「幼児も罪の赦しのため、そしてこの再生によって、出生により受け継いだ汚れから清められるために洗礼を受けるのである。」（同 DS 1514）

贖いの秘義との関係

こうして見てくると、アダムの子孫における原罪は、自罪という性格をもっていないということが明らかになります。人祖の過ちによって、その超自然的目標からそらされた本性における、成聖の恩寵の剥奪ということなのです。それは「本性の罪」であり、類推して「自罪」に比較し得るものにすぎません。罪を犯す前の原初の状態では、成聖の恩寵は人間の本性に与えられた超自然的な「素質」のようなものでした。恩寵の喪失ということは、当然罪の本質にかかわることです。何故なら、罪とはこの賜を与えてくださった神の意志を拒絶することですから。人間の本性は、その超自然的な豊かさの基である成聖の恩寵を失ってしまいました。そして人祖は、人間の世代が始まった時に、彼らが存在した状態でこの本性を全ての子孫に伝えたのです。それゆえ人間は成聖の恩寵を失ったままで受胎され、生まれるのです。遺産としての原罪の本質を構成するものは、その起源とつながった人間の「最初の状態」であったことは明らかだといえるでしょう。

今日のカテケージスを終えるにあたり、このシリーズを始めた時に述べたことをもう一度強調せずにはられません。すなわち原罪は、私たち人間のために、私たちの救いのために、人間となられた神の御子イエズス・キリストによって成し遂げられた贖いの秘義と絶えず関連させて考察しなければならないということです。託身（受肉）の救いの目的についての信経の条項は、主としてそして根本的に原罪に触れています。トリエント公会議の教令もまた、もっぱらこの結末との関連において構成されています。それは聖書、とりわけ「原福音」と呼ばれる、来たるべき「サタンの制服者」「人間の解放者」についての約束に出発点を置く全聖伝の教えの中に挿入されているといえるでしょう。これらのことはすでに創世の書をはじめとして、その後聖パウロのローマ人への書簡においてもこの真理がより一層十分に著わされるに至るまで、多くの書の中に著わされています。事実、使徒によればアダムは「来たるべきお方の前兆であった」のです。「一人の罪によって多くの人が死んだとしても、神の恩寵とこのただ一人の人イエズス・キリストの恩寵による豊かな賜は、多くの人々の上にあふれんばかりに注がれたからである。」「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の義によって多くが義とされた。」「つまり一人の罪によって有罪の判決がすべての人に及んだように、一人の正義のわざによ

て命を与える義もすべての人に及んだ。」（ローマ 5・14～15、19、18）

トリエント公会議はその教えの隅石として、特にパウロのローマ人への書簡を参照していますが、それはこのテキストが罪の普遍性と贖いの普遍性を肯定していると判断するからです。公会議は幼児洗礼を実践するよう訴えています、それは原罪一人祖から本性とともに受けた万人共通の遺産—が、イエズス・キリストにおける万人の贖いの真理と密接な関係があるからです。

《墮落した人間の状態》

信仰の年を閉じるにあたって 1968 年にパウロ六世教皇の宣言した信仰宣言（クレド）は、原罪についての聖書と聖伝の教えをそっくりそのまま再定義するものとなっています。これに耳を傾けてみましょう。

「われわれはアダムにおいてすべての人間が罪を犯したことを信じる。すなわちアダムの犯した原初の罪行が、万人に共通の人間性を、その罪行の諸結果をになう状態、人祖がはじめにあったような聖性と義のもとに立てられていた状態ではない状態、また人が悪も死も知らなかった状態ではない状態に陥れたことを信じる。すべての人に伝えられたのは、このような状態に落ちこみ、自分を飾っていた恩寵を奪われ、その自然の力をそこなわれ、死の支配のもとに従属させられた人間の本性であり、すべての人が罪の中に生まれるということはこの意味においてである。したがってわれわれは、トリエント公会議とともに、原罪が『模倣によってではなく出生によって』人間性とともに伝えられること、原罪がこうして『各人に固有のもの』であることを信じる。

われわれはわれらの主イエズス・キリストが十字架の犠牲により、原罪とわれわれ各自が犯すすべての私罪からわれわれを救われたことを信じる。こうして使徒パウロのことばどおり『罪が増したところには、それ以上に恩恵が増した』（ローマ 5・20 参照）のである。」

「神の民のクレド」として知られるこの信仰告白にしたがっていくと、トリエント公会議の教令と同様、聖なる洗礼、まず第一に幼児洗礼へとさかのぼります。「子どもが超自然的恩恵を奪われて生まれたとはいえ、キリスト・イエズスにおける神的生命を持つよう『水と聖霊によって』再生されるため」なのです。

贖いの光

誰にでも明白なことですが、このテキストも罪、特に原罪についての啓示による教義全体が、常に贖いの秘義と密接に結びついていることを確証しています。私たちもこのカテゴリーの中で、そのことを示すよう努めましょう。でなければ、人間の歴史の中での罪の実態を十分に理解することはできないでしょう。聖パウロはローマ人への書簡の中でこの問題についてはっきりと述べており、トリエント公会議は原罪に関する教令の中で特にこの書簡に言及しています。

パウロ六世教皇は、トリエントの教令に含まれた原罪に関する教義のすべての要素を「神の民のクレド」の中で贖い主キリストの光の下に再提議しました。

人祖の罪に関して「神の民のクレド」は「墮落した人間の本性」のことも語っています。この表現を正しく理解するためには、創世の書第 3 章に含まれる墮落についての記事に戻るのいいでしょう。この中には、神の介入を人間的に提示されたアダムとエバに対する神の罰も含まれています。聖書によれば罪の後、主は女に仰せになります。「私は、おまえの苦しみと身ごもりの数を大いにふやす。おまえは苦しみつつ子を生むことになる。おまえは夫に情を燃やすが、夫はおまえを支配する。」（創世 3・16）

「それから、男に向かって仰せられた、『おまえは妻の言うがままになり、私が〈食べるな〉と命じた木の実を食べたから、おまえゆえに、地はのろわれる。生きつづけるかぎりおまえは苦勞して、地から糧を得るであろう。地は、おまえのために、いばらとあざみを生やし、おまえは野の草を食うことになろう。さらにおまえは、額に汗を流して、糧を得るだろう。土から出たおまえなのだから、その土にかえるまで。ちりであって、ちりにかえるべき者よ。』（同 3・17～19）

この強く激しい言葉は、歴史にあらわれたこの世における人間の状況を指摘していると言えるでしょう。聖書記者は、これを神によってなされた有罪判決であるとするのをためらいません。それは「地の呪い」、すなわち目に見える天地万物が人間に対して反逆し、敵対するようになってしまったということを暗示しているのです。また聖パウロは人間の罪の結果として「被造物は はかなさに服従させられた」と言い、そのために「腐敗の奴隷から解放され」る時が来るまで、「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみにあっている」と言っています。（ローマ 8・19～22 参照）

創造の調和の喪失が、目に見える世界における人間の運命に影響を与えています。人間は生計の手段を得るために「額に汗して」働き、労苦につながれているのです。人間の全存在は労苦と苦しみで特徴づけられ、それは、女の産みの苦しみと、自分たちには関わりのないことだと泣きわめく子どもも無意識に、誕生の時からすでに苦しみ始めているのです。

神は人間を不死のため創られた

結局、地上における人間の存在全体は、死の恐怖の支配を受けているといえます。啓示によると、それは明らかに原罪と結びついたものです。罪そのものが霊的な死と同義語であり、罪によって人間は超自然的生命の源泉である成聖の恩寵を失ってしまうからです。原罪のしるしとその影響は、あの日以来全人類が経験してきた肉体の死に現されています。人間は神によって不死のため創られました。にも拘わらず、暗闇の中への悲劇的跳躍とも思える死が存在するのは、罪の内在的論理から言って罪の結果である神の罰なのです。これが啓示の教えであり、教会の信仰です。もし罪がなかったなら、地上での試みの結末はこんなにも劇的なものではなかったことでしょう。

人間が創られたのは、幸せになるためでもありました。そして地上における幸せとは、多くの苦しみを免れている状態、あるいは少なくとも苦しみを免れる可能性のある状態であったはずで、必ずしも死ぬ必要がない状態という意味で「死を免除されていた」と同じであったのです。創世の書で神に帰せられている言葉（創世 3・16～19）さらに聖書

と聖伝に現れる他の多くの言葉によってもわかるように、原罪によってこの免除は人間の特権ではなくなりました。地上における人間の生涯は、多くの苦しみを受け必ず死ぬということになったのです。

「神の民のクレド」は、人間の本性が原罪の後もはや「最初に人祖が得ていた状態」ではなくなると教えています。成聖の恩寵や他の数々の賜をも奪われたために「墮落」したのです。この恩寵という賜は、原初の義の状態において本性を十全なものとして構成していました。ここで私たちは、罪のために失われた不死や苦しみの免除や様々な賜を取り扱うだけでなく、理性や意志という内的性質、すなわち理性とか意志という平素のエネルギーをも取り上げたいと思います。529年にオランジェの公会議が表明したように、原罪の結果人間全体が体と靈魂ともども、混乱の中に投げ込まれたのです。そしてこれは、トリエントの教令でもそのまま繰り返されて、人間は悪い方へ変わってしまったと記されています。

人間の精神能力に関して真理を知るべき知的能力の低下、及び感覚がものの魅力にとりつかれて弱められたり情熱に影響されたりして、理性が与える善の誤ったイメージにさらされたためにおこった、自由意志の弱体化という点にこの墮落をみることができます。しかし教会の教えによれば、これは人間の能力にとって本質的なものではなく相対的なものであり、絶対的な墮落ではありません。ですから、原罪の後でも基本的な自然的・宗教的真理の数々や倫理的原理を人間はその知性を用いて知ることができますし、また善を行なうこともできるのです。従って、知性の低下と意志の弱体化についてはむしろ霊的感覚的能力が受けた「傷」として語るべきでしょう。知識と神の愛とのつながりという点でさえも、本質的能力を喪失したのではないからです。

ルター（や後のヤンセニストたち）がこれとは反対の命題を主張したのに対し、トリエントの教令は本性が根本的に健全なものであるという真理を強調し「アダムの罪の結果として人間が自由な意志を失った」わけではないということを教えています。ですから人間は、善であれ悪であれ真に倫理的価値のある行為ができるのです。これは人間の意志が自由であることによるのみ可能なことです。とはいえ、墮落した人間はキリストに助けられなければ、自己の完成と救いという超自然的善に自分を向かわせることはできません。

罪の後の本性の状態、及び特に人間は善よりも悪に傾きやすい状態を考え、「罪の火口」について述べましょう。それは原初の完全な状態にあった時には本性が免れていたものでした。この「罪の火口」はトリエント公会議で「欲情」とも呼ばれ、キリストによって義とせられた、つまり聖なる洗礼を受けた後でさえも、人間の中に存在し続けるものであるとつけくわえられています。また、トリエントの教令は「欲情」そのものはまだ罪ではないが罪の結果として罪への傾きである、とはっきり述べています。（『カトリック教会文書資料集』DS 1515 参照） 原罪の結果としてのこの欲情は、人間が能力を悪用して犯す様々な個人的罪への傾きの源泉です。（こうした罪は原罪と区別して自罪と呼ばれています。） この傾きは、聖なる洗礼を受けた後でも人間の中に残っています。この意味で、人間は誰でも自分の中に罪の「火口」をもっているのです。

カトリックの教義は聖書と聖伝に基づいて説明してきた語を用いて、墮落した人間の本性の状態を定義し、述べています。それはトリエントの公会議でも、パウロ六世教皇の「クレド」においてもはっきりと提示されているものです。けれどももう一度ここで注目すべきは、啓示に基づいたこの教義によると、人間の本性は「墮落した」ものではあっても、イエズス・キリストによって「贖われうる」存在であるということです。だからこそ「罪が増したところには、それ以上の恩寵があふれるばかりのものとなった」と言えるのです。（ローマ5・20） これこそが真実であり、その中においてこそ原罪とその結果について考えなければならないのです。

《罪は人間と神との契約を破る》

このシリーズのカテケージスにおいて、私たちは絶えず原罪に関する真理を念頭におき、同時に人類史の全時代にわたる罪の実体について思い巡らせています。歴史的体験は、啓示の示すものを確認しているということができます。罪は一人ひとりの生活の中に絶えず存在しています。人間の知識では罪は倫理的悪として存在し、倫理学（倫理哲学）がより直接に関係するものです。しかし、心理学、社会学のような記述的性質をもった人文科学の他の分野も、それぞれ独自の方法で罪と関わりをもっています。確かなことは一つ、（倫理的善と同様に）倫理的悪は人間の経験に属するものであること、そして経験の対象として罪を研究しようとする他の科学にとってこのことは出発点となります。

しかし同時に、啓示の助けなしに罪（あるいは罪という倫理的悪）の本質を完全に認識したり、適切に表現したりすることはできないということを認めなければなりません。信仰を通して神との関係を背景にしてでなければ、罪の実体を余すところなく理解することはできません。ですから、この関係に照らして罪の理解を発展させ深めるように努力しましょう。

啓示、特に聖書の場合、その中に含まれている罪についての真理は、罪そのものの「発端」に立ち返ることなしには示されません。ある意味では一人ひとりの人生に属する「自罪」でさえも、あの「発端」、人祖のあの罪と関連させて初めて十分に理解できるようになるのです。これはトリエント公会議のいう原罪の結果・「罪の火口」が人間の自罪の土台であり源であるのみならず、人祖の「最初の罪」がある程度残り、一人ひとりが犯すすべての罪の「モデル」となっているからです。

最初の罪も、罪そのものとしては個人的な罪でした。従って人間の他の罪のどれをとっても、最初の罪を「組み立てているもの」の個々の要素がその中に見つかります。

第二バチカン公会議は「人間は神によって義の中におかれたのであるが、悪霊に誘われて、歴史の初めから、自由を乱用し、神に対立するものとなり、自分の完成を神のほかに求めた」と述べ、人祖が原初の義の中で犯した罪について論じています。（『現代世界憲章』13）けれども人類が引き継いだ倫理的弱さの結果として、歴史を通して犯してきた罪はすべて等しく、このような本質的要素を反映しています。実際に個々の人間の行為として理解されるどの罪もすべて、特殊な「自由の乱用」、自由あるいは自由意志の悪用を含みます。人間が創造主の意向に反して自由意志を用いる時、態度で「神に対立する」時、

「自分の完成を神のほかにも求め」る時、被造物たる人間は自由意志を乱用しているのです。

人間の犯すどの罪にも常に本質的な要素は存在しています。神と人間について啓示された真理にてらしてみると、この要素は初めから罪という倫理的悪を構成しています。それは原初の義の中で犯された最初の罪のそれとは違った強さで示されるものです。原罪後に犯された自罪は、ある意味ではその出発点において受け継いだ悪への傾き（悪い欲望の火口、誘惑）の状態によって決まるものです。けれども、弱さを受け継いだからといってそれが人間の自由を取り消すことにはなりません。従って自罪にはすべて、神の意志に反対する真の意味での自由の乱用があります。この乱用の程度は多様であり、その多様さに応じて罪の程度も変わります。ですから、自罪を測るには異なった尺度を適用しなければなりません。その際、自罪の中に含まれる悪の程度を検討するという問題が生じます。このことから「重大な罪」と「小罪」との差異も出ます。重大な罪とは「永遠の死を招く」大罪のことです。なぜなら、大罪はそれを犯した人に成聖の恩寵を失わせてしまうからです。

不従順としての罪

聖パウロはアダムの罪について、それを「不従順」と記しています。（ローマ 5・19 参照）同様に人間の犯す「自罪」の全てに対してもそれは当てはまります。人間は神の掟に背いて罪を犯します。ですから、至高の立法者である神に対して「不従順」なのです。啓示に照らしてみれば、この不従順は同時に神との契約を破ることです。啓示から知り得た神は実際に契約の神であり、契約の神として神が立法者であることは明白です。事実、神は人間との契約の中に主の掟を契約の根本的な条件として書き込まれました。

こうして、創世の書にあるように（創世 2・3）、契約の中でまず初めに踏みにじられたものはあの原初の契約でした。これはモーゼの時代に主なる神とイスラエルとの関係においてより一層はっきりと現れています。シナイ山の麓で選ばれた民と交わされた契約は掟、つまり十戒で成り立つものです。（脱出 24・3～8、20 章、第二法 5 章参照）その掟は、神に関して、被造物、特に人間に関して全ての人がかかるべき態度についての根本的な、他人に転嫁することのできない原則を構成しているのです。

聖パウロのローマ人への書簡によれば、これらの根本的かつ譲ることのできない原則は、シナイ山での契約の文脈にも啓示されていますが、実際にはイスラエルになされた契約とは無関係に人間誰しもの「心に刻まれて」いるものです。使徒は次のように書いています。「律法のない異邦人が自然に律法のおきてを実行するならば、律法がなくても自分自身が律法となる。彼らは自分の心に刻まれているこの法の存在を示している。それを証明するのは彼らの良心である。また彼ら同士が相手に対して持つ非難や賞賛の内部的な判断もそれを証明する。」（ローマ 2・14～15）

従って、契約を背景とした律法の啓示によって神の手で強められた倫理的秩序は、たとえモーゼの律法と啓示によって示された範囲から離れたとしても、「心に刻まれた」法においてすでに効力をもっているのです。それが自然法であり、聖トマスがそれについて語る時、極めて巧みに説明しているように、それは人間の理性ある本性そのものに刻みこま

れているものだと言えるでしょう。（『神学大全』 I-II q. 91 a. 2; q. 94 aa5-6 参照）この法の履行は人間の行為の倫理的価値を決め、その善性を保証します。反対に、「心に刻まれた」つまり人間の理性的本性そのものに刻まれた法を犯すことは、人間の行為を悪に定めます。それは悪なのです。なぜなら、創造主である神が隠れてまします人間の本性と世界との客観的秩序に敵対するのですから。

啓示された法に照らしてみると、罪の性質が一層明らかになります。神によって制定された明白で絶対的な法を犯していることを人間は強く意識することができます。だからこそ、神の意向に反することを承知しているわけで、その意味で〈不従順〉、つまり従わぬ態度をとるのです。それは単に観念的な行為の原則に対する不従順という場合だけでなく、神のパーソナルな権威が明確に示されてある原則に対する、すなわち神の知恵と摂理の示す原則に対する不従順でもあります。道徳法全体は創造された世界の善を思い、特に人間の善を思う心遣いで神がお与えになったものです。アダムと結ばれた最初の契約においても、モーゼを通してのシナイ山上での契約においても、また最後に、キリストにおいて啓示され、その贖いの御血において封印された最終的な契約においても（マルコ 14・24、マテオ 26・28、コリント①11・25、ルカ 22・20 参照）神が記されたのは明らかにこの善のことなのです。

これを背景として考えると、法に対する〈不従順〉の罪は神御自身、立法者であると同時に愛する父にしています神に対する〈不従順〉であることが、さらに明白になります。このメッセージは、すでに旧約聖書の中に示されていますが放蕩息子のたとえ話の中に明確に述べられているのがわかるでしょう。（ホゼア 11・1～7 参照、ルカ 15・18～19、21 参照）この神に対する不従順、神の創造せんとする意志、また救わんとする意志に反対することは「自分の完成を神のほかにも求める」人間の欲望を含めて、〈自由の乱用〉に他ならないのです。（『現代世界憲章』13）

不信仰としての罪

受難の前日に、イエズス・キリストは聖霊が「この世に悟らせる」に違いない罪について語り、「私を信じないから」という言葉でこの罪の本質を説明なさいます。（ヨハネ 16・9）神に対する「不信仰」は人間が契約の神に背いて犯す罪の最初にして基本的な形です。この種の罪は、創世の書第 3 章で語られる原罪ですすでに明らかにされています。シナイ山上での契約で与えられた律法もこれに言及していますが、それはこの形の罪を退けるためなのです。「エジプトの地、奴隷の家からおまえを連れ出したのは、神なる主、私である。私以外のどんなものも神とするな。」（脱出 20・2～3）高間でのイエズスの言葉と福音書全体、新約聖書におけるイエズスの言葉もまた、これを意味しています。

この不信仰、創造主・父・救い主として啓示された神への信頼の欠如は、罪を犯すことによって人間が掟（律法）に背くばかりでなく、神に〈対立〉して「自分の完成を神のほかにも求め」ているということを指摘しています。このようにみると、全ての自罪のいずれにおいてもその根源には不信仰がこだましていることがわかるでしょう。それは、最初の罪のもととなった言葉、すなわち神に対する不従順を神のようになる、神のように〈善と

悪)を知る方法として示した試みるもの—サタンの言葉の(遠いかもしれないが)こだまであることは確かです。

しかしすでにみてきたように、自罪においても罪(死罪)の場合には、人間自らが神との対立の道を選択するのだということです。放蕩息子が愚かな冒険の始まりにしたように、人間が創造主の代りに被造物を選び、父の愛を拒絶するのです。人間の罪はいずれも全てある程度まで、あの〈罪の神秘〉(テサロニケ2・7参照)なのです。これを聖アウグスティヌスは「神をあなごるほどの自己愛」という言葉に要約しています。(『神国論』XIV 28, PL 41, 436)

《人間の罪と〈世の罪〉》

信仰に照らして考えると、罪についてのこのカテケージスでの吟味の直接の対象は自罪(個人の犯す罪)です。それはアダムの子孫の全てに影響を残した最初の罪(それゆえに原罪と呼ばれている罪)に関係しているものです。原罪の結果として、人間は遺伝によって倫理的に弱い状態で生れます。もし、キリストの贖いによる神から人類に与えられた恩寵との一致がなければ、簡単に自罪の道をたどります。

第二バチカン公会議はこの点に注目し、次のように記しています。「人間の全生活は、個人的にも団体としても、善と悪、光とやみの間における劇的な戦いとして現れる。むしろ人間は自分自身の力では悪の攻撃を効果的に退けることができないことを発見し…。しかし、人間を解放し力づけるために主みずからが来られて人間を内部から再生」する。(『現代世界憲章』13) 自罪についての考察は、すべて墮落した人間の本性の状態につながる緊張と闘争の関係という立場でなされるべきです。

自罪はこの本質的な性質、つまり常に一個人の責任ある行為であり、道徳法とは相容れない行為、神の意向に反する行為であるという面をもっています。この行為の中に暗に含まれ、必然的に伴われるものを見つけだすのに聖書が役立ちます。すでに旧約聖書に、神の啓示に照らされて様々な瞬間や状況での罪の実体を指摘するための表現がみられます。それは、時には単に〈悪〉と呼ばれ、罪を犯す人は「主の目の前で悪を」行ないます。それゆえ、〈神を恐れない〉者と命名されている罪人は「神を忘れる」人であり、「神を知りたくない」人、「その目に神への恐れがない」人、「主によりたのまない」人です。(第二法 31・29、詩篇 9・18 参照、ヨブ 21・14、詩篇 35・2、31・10) 実に「主は見ない」「主は仇をとるまい」と信じて悪人は神を侮ります。(詩篇 93・7、10・13) さらに罪人(神を恐れない人)は義人を虐待するのを恐れず、「やもめやみなし子に罪深い裁きを行ない」「善のかわりに悪で返し」さえするのです。(詩篇 11・9、81・4、93・6 参照、08・2~5) 聖書では罪人の反対は義人です。罪はこの語のもつ最も広い意味での不義です。

罪は不義であり、犯罪であり、汚点である

幾多の様相をもつ不義には、他人に対してなされた悪事、罪深い行為によって他人の権利を侵害するという概念があり、また、長上に対する〈反抗〉の意味もあります。反抗が

預言書で読むような神に対して向けられたものならば、なおさら容易ならぬものと言えるでしょう。「私は子らを養い育てたが、彼らは私に逆らった。」（イザヤ 1・2、48・8～9、エゼキエル 2・3）

罪は〈不義〉を意味しています。同時にこの語は、聖書によると、罪を犯したゆえの人間の邪悪な状態を意味します。語源上この語は〈正しい道から逸脱すること〉〈不正をすること〉あるいは、〈形を損なうこと〉つまり実際に正義を外れていることを意味するものです。不義の状態という意識は、カインの激しい後悔の告白においてははっきりと見られます。「私の罪は赦しがたいほどに大きい。」（創世 4・13） また詩篇にも「その罪は私の頭を越え、重荷のように、私は荷を負いすぎた」とあります。（詩篇 37・5） 犯罪行為（不義）は、神との関係の断絶の意味を含み、語源に〈隣人に関して欠点をもつこと〉という意味をもっています。詩篇作者もこれに気づき、次のように述べています。「あなたに向かって私は罪を犯し、御目の前に悪事を行なった。」（詩篇 50・6）

聖書によれば、罪は〈不義〉という本質から神に逆らった犯罪であり、神の恩寵に対する忘恩であり、至福なる御方を侮辱することでさえあります。「主の前で悪事をするほど主を軽んじるに至ったのはどういうわけだ」と預言者ナタンは、罪を犯したダビドに尋ねます。（サムエル下 12・9） 罪はまた汚点であり不潔です。それゆえエゼキエルは罪とともに汚れについて語ります。（エゼキエル 14・11 参照） 特に偶像崇拜の罪について、預言者たちは〈淫行〉と比して度々述べています。（ホゼア 2・4、6～7 参照） ですから詩篇作者でさえ乞い願います。「ヒソブをもって清めれば、私は清くなり、洗えば雪よりも白くなる。」（詩篇 50・9）

同じ流れで考えると、福音書のイエズスの言葉が一層よくわかるでしょう。「人から出るものこそ人を汚す。すなわち悪い考えは内から、人の心から出る。淫行、窃盗、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、詐欺、猥褻、嫉妬、誹謗、傲慢、愚痴、これらの悪いことはみな内から出て人を汚すものだ。」（マルコ 7・20～23、マテオ 15・18～20 参照） 新約聖書中の罪を示す語彙は旧約聖書ほど多くないことに注目すべきです。特にギリシャ語での〈不正〉〈不義〉〈神の王国に対する敵対〉という語が用いられていますが、また、〈過失〉〈欠点〉あるいは〈負債、例えば『私たちの負い目をもおゆるしてください』すなわち罪〉という言葉でも表されています。（マルコ 7・23、マテオ 13・14、24・12、ヨハネ①3・4 参照、マルコ 6・12、ルカ 11・4）

罪は意識してなされる自由な行為である

罪が人間の内から、人の心から出るものというイエズスの言葉を見ましたが、この言葉は罪の本質を強調しています。人間の内から生じ人間の意志の中にあるのですから、罪はまさにその本質から常にその人の行為なのです。意識してなされる自由な行為の中には、人間の自由意志が表れます。倫理的価値は、自由の原則を土台としなければ、敬虔という事実の上でなければ成立しないものです。この限りにおいてのみ、その行為が倫理的に悪であると評価することができるのです。ちょうど、客観的基準に従って、また最終的には神の意向によって、一つの行為を善と評価し、承認するように。個人の責任は、自由意志

から生じるものにおいてのみ立証されるものです。人が自由に意識しておこなう行為が、倫理基準（神の意向）に、法に、掟に、最終的には良心に敵対しているという意味においてのみ、その行為は罪となります。

聖書の中で語られる罪とは、この各々、個人的という意味においてです。聖書は原則として特定の対象、罪の原因となる人間に言及するからです。文中に〈世の罪〉という表現が出てくる場合でも、少なくとも因果関係と責任に関して個人的なものであることは否定されません。〈世〉は、罪の原因にはなり得ません。世の中にいる理性ある自由な存在、つまり人間（あるいは前回のカテケージスでみてきた、存在のもう一つの領域にいる創られた純粋な霊すなわち天使）でなければ、罪の原因になり得ないのです。

〈世の罪〉という表現はヨハネの福音書に見られます。「世の罪を取り除く神の小羊を見よ。」（ヨハネ 1・29） 典礼書は〈世の罪〉といています。ヨハネの手紙には次の文があります。「世と世にあるものを愛するな。…世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりなどはすべて御父から出るのではなく世から出る。」（ヨハネ①2・15～16） さらに一層厳しく「私たちが神から出た者であり、世がすべて悪者の配下にあることも私たちは知っている」とあります。（同 5・19）

〈世の罪〉についてのこれらの表現をどう解すべきでしょうか？ 引用された文において〈世〉は神の創造の時の〈世〉ではなく、ほとんど神に閉ざされた霊的空間である特別な次元としての世であり、そこでは創造された自由の土台の上に悪が生じるとはっきりと指摘しています。〈昔の蛇〉すなわちサタン、〈嘘の父〉の影響によって人祖の〈心〉に伝えられたこの悪は、まさに人類史の初めから、悪の実をみのらせてきました。原罪は引き続いて後に「悪の欲望の萌芽、あるいはそそのかし」すなわち人間を罪に誘う三重の欲情を残しました。それが働きだすと、人類の犯した数多くの自罪が新たな自罪の起こる状況を生み出し、ある方法で一人ひとりをそこへ引き付ける一種の〈罪の環境〉を形成するのです。したがって、〈世の罪〉は原罪と同一視するわけにはいきません。むしろ〈世の罪〉は、各世代の歴史、人類の歴史全体における原罪の結果を総合・要約したものです。そうするとまた、人間の様々なイニシアティブや性向、業績や慣例という文化や文明を構成するもの全体の中に、罪が刻印されているといえます。この意味で、構造上の罪といわれる罪を一種の〈伝染病〉にたとえることができるでしょう。この伝染病は、人間の心から、人間の生活する環境、人間の存在を支え決定する構造の中に入りこみ広がっていくのです。

罪には社会的次元がある

罪は、個人的行為という本質を持ちながら、他方社会的面をも有しています。1983年のシノドス後の使徒的勧告『和解と悔悛』の中で、これについて話しました。あの文書に記したように〈社会的罪〉と言う時、まず第一に個人的罪が何らかの形で他者に影響を及ぼすことを知らねばなりません。神秘で不可解ではあっても、現実具体的に人間は互いに結びついているからです。この人間同士の結びつきの他の局面は、深遠ですばらしい聖徒の交わりの中で展開される信仰のレベルでの結びつきです。聖徒の交わりのおかげで「す

すべての霊魂は自らを超越し、この世を向上させる」ことができたのです。この上昇の法則に対して、不幸にも下降の法則があります。それゆえ罪の交わりについても述べることができます。罪によって下落した霊魂は罪の交わりにより教会を、場合によっては全世界をも己れと共に引きずり落とします。（『和解と悔悛』16）

そこで勧告は、〈社会的罪〉として特記すべき罪について述べています。このテーマは、もう一つのカテケージスのシリーズの中でふれることになるでしょう。

〈社会的罪〉が聖書の〈世の罪〉とは同じでないということは、今まで述べてきたことから十分に明らかです。けれども〈世の罪〉を理解するためには、罪の個人的な面ばかりでなく、その社会的面をも考慮しなければならないことを認めねばなりません。勧告では次のように続けています。「心の奥底の人目にはふれない罪、極めて厳密に見ても個人の罪としか言えないものでさえ、排他的に罪を犯す本人だけの問題にとどまるような罪はありません。強かろうが弱かろうが暴力を用いて、多いにしろ少ないにしろ害を与えることによって、どの罪も全て、全教会、全人間家族に影響を及ぼします。この用語の第一の意味によれば、全ての罪は疑いもなく社会的罪と考えられます。」（同）そしてこの見地から、なぜこの世が〈世の罪〉について語る際に、聖書がほのめかすあの特別で否定的な霊的状況に陥るのかということ、罪の社会的面ということを考えればより一層の理解が得られるのだと結論づけることができるでしょう。

《罪は人間を疎外する》

このカテケージスで罪について考察を進めると、創世の書第3章のあの最初の罪へと目が向けられます。聖パウロは最初のアダムの〈不従順〉と言っていますが、これは〈善悪の知識の木〉についての創造主の掟に対する違反と直接つながっていました。その箇所を表面的に読み流せばあの禁令（木の実を食べてはいけない）は、たいしたことではないという印象を受けますが、もっと深く分析すれば、禁令がたいしたことではなさそうに見えても、全く根本的な事柄を表していると容易に確信できるでしょう。サタンという言葉を見れば明らかです。サタンは人間を説き伏せ、創造主の禁令とは反対の行動をさせるために、次のような理由をつけて誘惑します。「おまえたちがその実を食べれば、そのとき目がひらけ、善と悪を知る天人のようになると、神は知っているのだ。」（創世3・5）

こうして見ると、知識の木の実を食べてはいけないという禁令の目的は、人間に、自分は〈神のよう〉でなく被造物にすぎないと気づかせることにあったと考えなければならぬようです。人間は〈神の似姿〉に創られているのですから、特別に完成された被造物です。しかしそうであっても、ただの被造物にすぎないのです。これが、人間という存在の根本的な真理でした。初めに人間が受け取った掟はこの真理を含んでおり、忠告の形で表されていました。皆さんは、神との親しい交わりに招かれた被造物であること、そして神御一人だけが皆さんを創り給うた御方であることを忘れないでください。分不相応の者になりたいと思っはなりません。〈神のように〉になりたいと望んではなりません。分相応に行動しなさい。そうすればするほど、幸せになるでしょう。人間は〈神の似姿〉という存在にまで、すでに高められている状態にあるからです。このことが、皆さんを可視的

世界の他の被造物と区別して、他の被造物の上に据えるゆえんなのです。けれども同時に、神の似姿という状態のゆえに分相応に行動しなければなりません。創造主である神が、始めから被造物である皆さんと結ばれた契約に、どうか忠実であってください。

原初の法則

この真理—人間の行状を統べる原初の法則—は、創世の書第 3 章のサタンの語りかけによって疑惑の対象となっただけではなく、論争的ともなりました。黙示録で呼ばれる「昔の蛇」は誘惑の言葉を言うにあたり、この法則を解釈する基準を初めてはっきりと述べました。そして後に、この基準によって罪深い人間は、己れを肯定しようとか、神抜き
の道徳を作ろうとか企て、輾転としているのです。というのは、この基準に従えば、神は、人間を〈疎外〉する存在であるから、人間が人間らしくありたいのなら神を捨てねばならない、ということになるからです。（例えば、フォイエエルバッハ、マルクス、ニーチェ）

〈疎外〉という語は多様なニュアンスをもっています。しかしこの語はどの場合にも、他人のものである何かを〈強奪〉することを示すものです。まず最初に、創世の書第 3 章でサタンが、被造物・人間に属するものを創造主が〈奪い取った〉と言います。「神の似姿である存在」とは人間に属するものであって、神への依存をどんなわずかなことであっても排除しようとしています。この形而上学的な仮定からは、全ての宗教は現実の人間の状態とは両立しないとして、拒絶する態度が論理的に引き出されます。事実、無神論者（あるいは反有神論者）の哲学は、宗教のせい、人間としての存在に属するものを人間自らが放棄したり、奪われるにまかせていると主張するのです。また神の概念を形成する際にも、人間は自ら疎外を作り出すと言います。それは、人間の想像した申し分のない幸福な存在に役立つために、もともと人間のものであったものを放棄するからです。そうすると宗教は〈観念的〉に作り出した神というもののために、自己喪失の状態に留まることを強調し、弁護し、煽り立てるものになります。宗教は、人間から尊厳と権利を〈取り上げる〉主な要素の一つ、ということになってしまうのです。

誘惑と墮落についての聖書の物語から、この誤った理論—宗教史と心理学ともデータとは全く相反するもの—が、ある類推を提示していることに注目しましょう。創世の書第 3 章のサタン（昔の蛇）は神の存在に異議を唱えず、また創造の事実を直接否定することさえしていないのは意味深長なことです。これらの真理は、あの時には明白すぎて否定できなかったのです。その代り、この明白さにも拘わらず、サタンは—気ままに謀反を選んだ一被造物としての自分の経験から—人間の良心に〈疎外〉のイデオロギーの核を構成するものを〈幼芽〉の形で植え付けようと、すでに「そもそもの始めから」すきを狙っていたのです。そのようにしながら、サタンは創造の真理の根本的な逆転を、その最も深奥の本質的な部分において演じます。この世に惜しみなく存在をお与えになる神の座、創造主である神の座に、創世の書第 3 章のサタンの言葉は、創造に対する特に人間に対する〈横領者〉であり〈敵〉である神を示すのです。実際には神の〈似姿〉に創られていたゆえに、人間が特別な天与の賜の受け手であることは明らかであったにも拘わらず、真理は虚偽に追い出され、嘘にすり替えられてしまいます。歴史の「始め」にこの詐欺を行なったサタ

ンのことを福音書は「嘘の父」と言っていますが、その「嘘の父」の手で真理は巧みにすり替えられたのです。「彼は始めから人殺しだった、彼は真理において固まっていなかった。彼の中には真理がないからである。彼は嘘をつくとき、心底から嘘を言う、彼は嘘つきで、嘘の父だからである。」（ヨハネ6・44）

創造主の似姿として自由を与えられた被造物である人間の世界での罪の根源として、歴史の始めに見出されるこの〈嘘〉の源泉を探し求めると、時々アウグスティヌスの次の言葉が心に浮かんできます。（神を軽蔑するほどの自己愛） 原初の嘘は、神を軽蔑するに至る憎しみにその源がありますが、これは倫理的拒絶の尺度として人間の最初の罪に反映しています。この尺度で測るなら、聖パウロがアダムの罪を「不従順」と述べて何を教えようとしたかが一層深く理解できます。使徒は、あからさまに神を憎むとは言わず、むしろ創造主の意向への「不従順」、敵対と言っています。これは人類史上ずっと、罪の主な特徴となって残るでしょう。この遺伝の重みに沈んで、人間の意志は弱くなり、悪に傾きやすくなって、永久に「嘘の父」の影響の下に身をさらしたままになるでしょう。歴史上の様々な時代を見れば気づくことですが、現代では、不可知論から無神論、さらには反有神論まで、様々な神否定がその証拠となります。それらは異なった方法で、宗教と倫理の〈疎外する〉性質についての概念を示し、〈嘘の父〉が始めに示唆した通り、明らかに疎外の根源は宗教にあるというのです。

しかし物事を偏りなく見てはつきり言えば、啓示と信仰に照らした時、疎外の理論は逆転されるべきものと言わねばなりません。人間を疎外に導くものは明らかに罪であり、罪だけなのです。そもそもの始めから、ある方法で人間が他ならぬ己れの間性「相続権を奪われる」ようにしむけたのは、明らかに罪なのです。罪は様々な方法で人間の尊厳—つまり神の似姿に創られていること—の決定的な要素を人間から盗み取るのです。全ての罪はこの尊厳を〈減らすのです〉。人間は「罪の奴隷」になり下がればなり下がるほど、それだけ神の子の自由を享受できなくなります。（ヨハネ 8・34） 独立した個人（理性をもつ、自由な、責任を果たすことのできる被造物）として存在するために必要なこと、すなわち自分自身の主人であることをやめてしまうのです。

聖書はこの疎外の概念の三面に触れ、効果的に強調しています。つまり罪人は己れ自身を離れ（罪人は胎にいるときから迷い）、神から離れ（私から離れる者、神の命を離れた）、社会から離れる（イスラエルの市民権ももたず）のです。（詩篇 57・4 参照、エゼキエル 14・7 参照、エフェソ 4・18、2・12 参照）

価値なきものの奴隷

罪は「神に逆らう」ばかりでなく、人間にも逆らうものです。第二バチカン公会議が教えているように、「罪は人間そのものを弱く小さくし、人間をその完成から遠ざける」のです。（『現代世界憲章』13） それは論証する必要など全くない真理であり、一見するだけで十分わかることです。多くの文学作品や映画や演劇がその雄弁な証拠ではないでしょうか。こうしたものの中での人間は弱められ、当惑し、魂を奪われたかのようになり、自己や他人への冷酷な敵対者、無価値なものの奴隷であるかの如くにみえます。かつて、

絶対者と接していた事実が失われているのを確かめるかのように、決して来ることのない何者かを待ちわび、ついには自分自身をも失ってしまうのです。

罪は恐ろしい（破滅的な力）です。すなわち人間と人間社会の生活の善を惑わし、容赦ないひどい悪意で破壊するものです。このことを真に理解するためには、内的であれ外的（社会的、歴史的）であれ、経験を参考にすれば十分です。ですから、〈社会的罪〉について当然語ることができます。（『和解と悔悛』16 参照）けれども、罪の社会的次元の根源には常に個人の罪があることを認め、罪が、その主体と原因、つまり個人としての人間において破壊するものを、まず強調しなければなりません。

これについては、聖トマス・アクィナスの考えが思い出されます。彼は「人間が行なういかなる倫理的善行によっても善くなるのと同様、人間のするいかなる倫理的悪行もその人間を同じように悪くする」と言っています。（『神学大全』 I-II q. 55, a. 3; q. 63, a. 2 参照）従って、罪は本質的に人間にふさわしいものである善を破壊します。罪は人間固有の善を人間から〈奪い〉ます。人間から〈強奪する〉とも言えます。ヨハネの福音書でイエズスが説くように、この意味で「罪を犯すものはみな罪の奴隷」なのです。（ヨハネ 8・34）これは明らかに〈疎外〉の概念に含まれているものです。従って罪は理性のある自由な人間を真に〈疎外するもの〉だと言えます。理性のある人間にとっては真理を追求し、真理に生きることはふさわしいことですが、罪は善についての真理のあるべき場に真理でないものを乱入させます。罪は〈見せかけの善〉のために真実の善を排除します。〈見せかけの善〉は真の善ではありません。なぜなら真の善は排除されて〈にせもの〉に場を譲ったのですから。

罪によって起こる疎外は、認識の領域に触れますが、むしろ知性を通じて意志に影響を与えるものです。その時に意志で生じる事態は、聖パウロのローマ人への書簡の中で最も正確に表現されているといえます。「わたしは自分の望む善をせず、むしろ望まぬ悪をしているのだから。もし望まぬことをするなら、それをするのは私ではなく私の内に住む罪である。そこで、善をしたいとき悪が私のそばにいる。…私はなんと不幸な人間であろう。」（ローマ 7・19～21、24）

人間は罪を通して自己を罰する

すでに明らかなように、人間の真の疎外—神の似姿に創られた理性のある自由な存在の疎外—とは、「罪の下にあること」に他なりません。（ローマ 3・9）聖書は罪のこの面をはっきり強調しています。罪は神に〈逆らって〉いるばかりか、同時に人間にも〈逆らって〉いるのです。

ところで、もしもその論理から、また啓示から、罪が適当な罰を要求するということが事実ならば、この罰は始めから他ならぬ罪そのものによって構成されているといえます。罪を通して人間は自分自身を罰するのです。ある人が言ったように、罪には、罪そのものもつ内在的な罰が含まれています。神の欠如ということなのですから、それはまさに地獄なのです。

「だが、彼らは、ほんとうに私を傷つけられるだろうか。いやむしろ自分のため、自分

の顔を辱めるためではないのか」とエレミアを通して神は仰せられます。(エレミア 7・19) 「おまえの罪自体がおまえを罰し、おまえの逆がおまえをこらしめる」と。(同 2・19) 預言者イザヤは次のように嘆き悲しみます。「みな、木の葉のようにしぼみ、風のように悪に運び去られた。…それは、主がみ顔を隠し、罪におちる私たちを見すごされたからだ。」(イザヤ 64・5～6)

人間が自ら罪におちるにまかせたことは、明らかに人間の人格の疎外としての罪の意義をこの上なく雄弁に説明するものです。とはいえ、人間がそれに気づいている間、人間が罪の意識を保ち続けている限りは悪は完成されてはいませんし、少なくとも癒されないことはありません。けれども、この罪の意識が欠けている場合には倫理的価値の完全な崩壊は避けられず、破滅の危機が恐ろしい現実となって人間に近づいてくるのです。ピオ十二世教皇の厳粛な言葉(もうことわざのようになっていますが)を常に思い出し、熟考しなければなりません。「今世紀の罪は、罪の意識を失っていることである。」(Discorsi e Radiomessaggi, 1946, VII, 288 参照)

《悪の力と戦う》

第二バチカン公会議の『現代世界憲章』の序文にこう書かれています。「公会議はここで、人間の世界、つまり人類家族とこの家族がその中で生活している諸現実の総体を思い浮かべている。これは人類の歴史が演じられている舞台であり、人間の努力と失敗と勝利が刻みつけられている世界である。この世界はキリスト信者の信仰にとっては、創造主の愛によって造られ保たれており、罪のどれい状態に陥ったが、キリストの十字架の死と復活とによって『悪しき者』の権力が破壊され、解放された世界であり、こうして神の計画に従って改善されてゆき、ついには完成に達する世界である。」(2番)

これこそ、このカテケージスの展望を示すものです。そもそもの初め、人類の全歴史を通しての悪の実体、罪の実体を取り上げています。罪の総合的なイメージを還元しようと、何世紀にもわたる人類の多種多様な経験から学び得たものを利用してはいます。しかし、罪はそれ自体、悪の秘義であることを忘れてはいません。罪の歴史的な始まりやその相次ぐ展開は、創造主—特に御自身の似姿である人間の創り主としての神—の秘義に言及することなしには十分に理解できるものではありません。先に引用した公会議の言葉は、このカテケージスの最初から注目していたように、悪と罪の秘義(不義の秘義)は(贖いの秘義)、イエズス・キリストの(過越の秘義)に言及しなければ理解できないということです。明らかに、この(信仰の論理)は最も古い幾つもの信経の中で表されています。

教会はこの罪についての真理の見解を絶えず宣言し公言してきました。それは創世の書に見られる贖いの最初の宣言の時以来、私たちに知らされてきたものです。事実、創造主である神が人間と結んだ最も古い契約に関わる最初の掟に人間が背いた後、創世の書は次の対話を示します。主なる神は、男を呼んで「どこにいるのか」と仰せられた。「園であなただの足音を聞きましたが、私は裸なので、こわくなって、隠れました」と男は言った。「裸であることを、だれが、おまえに言ったのか。さては、私が食べるなど命じたあの木の実を食べたのだな。」男は答えた「あなたが私のそばにおいでくださった女が、あの木

の実をくれたので、私も食べました。」主なる神は女に向かって仰せられた。「どうしてそんなことをしたのか。」女は答えた「へびにだまされて食べました。」（創世 3・9～13）

そこで主なる神はへびに向かって仰せられた「おまえは、そのようなことをしたのだから…のろわれたものとなろう。…私は、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に、敵意を置く。女のすえは、おまえの頭を踏みくだき、おまえのすえは、女のすえのかかとをねらうであろう。」（創世 3・14～15）

罪に対する直接の答え

サタンの言葉の吟味や最初の罪の描写から、すでにわかっている真理を示す表現や方法という点でも、創世の書第 3 章の文は〈ヤーウィスト〉の文脈と調和よく適合しています。聖書の表現による外観にも拘わらず、本質的な真理は、それ自体明らかなものです。真理はそれ自体理解されうるものです。しかし、聖書全体の中でこのテーマについて述べられている事柄を考えることにより、また聖書のより完全でより全体的な意味の中で考えることによって、この真理は一層明らかになります。

創世の書第 3 章の 9 節から 15 節（及びこの章の続きの部分）は、人間の罪に対する神の答えについて述べています。それは最初の罪に対する直接の答えであると同時に、地上での人類の終りに至るまでの将来の歴史全体を見通した答えでもあります。創世の書と黙示録との間には真実の連続性が存在し、神によって啓示された真理には深遠な一貫性が存在します。啓示のもつこの調和のとれた一貫性は、自覚して信じる人のもつ〈信仰の論理〉があてはまるものです。罪に関する真理は、この論理の発展の中に含まれています。

創世の書によると、人間の最初の罪は〈不従順〉として、つまり創造主の意向を表す掟に敵対するものとして描かれています。このことはすでに考察しました。人間は（男性も女性も）この行為に対する責任があります。これは、アダムが自分のすることを完全にわかっていた上で自由にそれをしたからです。ある目的に向かって行動する人間の歴史の中で、全ての自罪に同じ責任が見出せます。この点について創世の書に記されていること、すなわち主なる神は二人に（最初は男 それから女に）、彼らの行為の動機を「どうして」と尋ねられたのは意味深長です。これによってこの行為の本質的な意義は動機、つまり行為の目的に関係のあることがわかります。神がお尋ねになった「どうして」とはどんな動機で？ という意味ですが、また何の目的で？ ということも示しています。ここで女は（男と共に）「へびにだまされた」と、サタンにそそのかされたことに言及しますが、この答えから次のことを推察しなければなりません。「神のようになるだろう」と言ってサタンが提案した動機は、創造主の禁令に決定的な方法で背くことに手を貸しました。そして本質的な次元を最初の罪に与えたのです。罰の宣告の中で、神は直接にはこの動機について言及しません。しかし、それは神に背く主張をすることや神の代わりになろうとすることの重大さと愚かさと思い出させるものとして、また原罪と原罪に源をもつ全ての罪の最も本質的で深遠な次元を示すものとして間違いなく存在し、歴史と聖書の筋書きを支配しているのです。

人間の最初の罪に対する答えに続いて、神が、黙示録に「全世界を迷わす昔のへび」と

記された者すなわちサタンに注意を向けられたのは、意味あるふさわしいことだと言えます。創世の書で主は「おまえはそのようなことをしたのだから…のろわれたものとなろう」と仰せられます。この呪いの言葉は、キリストも「嘘の父」と呼んだ蛇に向けられたものです。同時に、最初の罪に対する神の答えには、「嘘の父」と女、そのすえとの間の歴史全体にわたる戦いについても告げられています。

第二バチカン公会議は、この問題について非常に明白に宣言しました。「やみの権力に対する苦しい戦いは、人間の歴史全体に行き渡っている。それは世の初めから始まったものであって、主が言われるように、最後の日まで続く。人間はこの戦いに巻き込まれているので、善に着くためには常に戦わなければならない、神の恩寵の助けと大きな努力なしには、自己の統一を確立することもできない。」（『現代世界憲章』37）別の文章にも、人間誰も戦い抜かねばならない「善と悪との」戦いについて、さらにははっきりと表明されています。「人間は自分自身の力では悪の攻撃を効果的に退けることができないことを発見し、各自が鎖で縛られているように感じる。」しかし公会議は、贖いについての真理と信仰の確信とを対置させた形で、力強く断固として述べています。「人間を解放し力づけるために主みずからが来られて人間を内部から再生し、人間を罪のどれいとして捕えていた『この世のかしら』を外に追い出した。」（同13）

教会の教導職のこうした数々の教えは、まず創世の書第3章15節で、後には聖書全体で示された罪と贖いに関する真理を、明確な方法で今日も繰り返しています。『現代世界憲章』の言葉をもう一度読みましょう。「人間は神によって義の中におかれたのであるが…歴史の初めから、自由を乱用し、神に対立するものとなり、自分の完成を神のほかに求めた。」（前出）最初の罪の場合であれ、人間の他の全ての罪の場合であれ、まさしくこれは言葉の示す厳密な意味での罪の状況です。しかし公会議は、最初の罪は「悪霊に誘われて」犯したことを決して忘れません。知恵の書に「死がこの世に入ったのは、悪魔のねたみのためだった。悪魔に属するものはそれを体験する」とあります。（知恵2・24）この場合の〈死〉は、罪それ自体（成聖の恩寵によって与えられた聖なる生命の喪失という靈魂の死）と、光栄ある復活の希望を奪う肉体の死との両方を意味しています。〈善悪を知る木〉に関する法を犯した人間は、神なる主によって、地上での歴史全体にわたって〈生命の木〉から離されてしまいました。

人間の歴史における最初の罪とその遺産について言及している公会議の文書には、創世の書3章15節の神の言葉「私は敵意をおく」で告げられた戦いの見通しが含まれています。この結果として、もし罪が初めから人間の自由意志と責任とに連なっていて、人間と神との間に〈劇的な〉問題を繰り広げるなら、人間が罪の故に「やみの権力に対する苦しい戦い」（『現代世界憲章』37）に従事していることも当然ながら真実であることとなります。人間は、自分自身や地上での歴史より遥かに大きなあの不義の秘義の中に巻き込まれ、鎖に縛られていると言えるでしょう。

エフェソ人への書簡によると「私たちが戦うのは血肉ではなく、権勢と能力、この世のやみの支配者、天界の悪霊だからである。」（エフェソ6・12）歴史全体だけでなく、特に現代を圧迫しているぞっとするような罪の現実を考えると「人間は…やみの権力に対

する厳しい戦いに従事している」という聖書の、そして公会議の恐るべき真理に引き戻されます。しかし、このやみの権力の秘義には、そもそもの初めから冷酷な罪の宣告という悪夢から歴史を解放する光—救世主のお告げ—が輝いていることを忘れてはならないのです。

《救いについての〈原福音〉》

聖体祭儀の第四奉献文の中で教会は次のように神に語りかけています。「聖なる父よ、わたしたちはあなたをたたえます。あなたは偉大なかた、英知と愛によってすべてのわざを行われました。ご自分にかたどって人を造り、造り主であるあなたに仕え、造られたものをすべて支配するよう全世界を人の手におゆだねになりました。人があなたにそむいて、親しい交わりを失ってからも、死の国に見捨てることなく……」と。

創世の書第 3 章は、人間の最初の罪に対する神の答えを記していますが、その複雑な内容が、教会のこの祈りに示された真理と調和している、と前のカテケージスの中で述べました。そこには、人類史のそもそもの初めから人類が巻き込まれてしまった〈悪の権力〉との戦いについて語っています。同時に、神は人間を死の国に見捨てることはなく、〈罪の奴隷〉として墮落させたままにはなさないということも保証されています。ですから神は、女を誘惑した蛇に告げます。「私は、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に、敵対を置く。女のすえは、おまえの頭を踏みくだき、おまえのすえは、女のすえのかかとをねらうであろう。」（創世 3・15）

創世の書のこの部分は、〈原福音〉または贖い主メシアについての最初のお告げと呼ばれています。それは私たちも知っている、原罪の後の墮落した状態にある人類に関する神の救済の計画を啓示しており、特にその計画の中心的出来事を示すものです。前に引用した第四奉献文で言及されたのと同じ出来事で、その時私たちは主に向かい、次のような信仰告白をするのです。「時が満ちて、あなたはひとり子をわたしたちに救い主としておつかわしになりました。聖なる父よ、あなたはこれほど世を愛してくださったのです。おんひとり子は、聖霊によって人となり、おとめマリアから生まれ、罪のほかはすべてにおいてわたしたちと同じように生活」なさいました。

救いを目指して

創世の書第 3 章の記事は〈原福音〉と呼ばれていますが、それはキリストの福音である新しい契約という啓示においてのみ、その確証と成就がみられるからです。旧約の契約では、このお告げは数々の異なった方法で常に繰り返し呼び起こされました。儀式、象徴的な表現、祈り、預言、メシアを目指して努力する〈神の民〉イスラエルの歴史そのものの中で。けれどもそれは、いつも旧約聖書の不完全で暫定的な信仰に覆われており、このお告げがキリストにおいて成就される時こそ、イスラエルの一神教において内在するメシアについての、三位一体についての啓示が余すところなく実現されるのです。その時、新約聖書は旧約聖書の意味するところをくまなく発見するよう導いてくれます。聖アウグスティヌスの有名な言葉に「旧約聖書の中には新約聖書が隠れてあり、新約の中には旧約が明

らかにされている」とあります。(Quaestiones in Pentateuchum II, 73 参照)

〈原福音〉を分析し、そこに含まれているお告げと約束とに目を向けるなら、神は人類を罪と死の権力に委ねてしまわれたのではなかったということがわかるでしょう。神は人類を救うことをお望みでした。神は御自分の方法でそれをなさいました。卓越した神聖さという尺度に従い、同時に愛なる神だけが見せることのできる目立たない方法で。

〈原福音〉の内容は、〈悪の権力〉を代表する者と、創世の書で〈女のすえ〉と呼ばれた者との間に戦いを告げる時(私は敵対を置く)、この目立たない救済を示しています。それはキリストの勝利で終る戦いです。(彼はおまえの頭を踏みくだく) けれどもこの勝利は十字架の犠牲という値を払って得られるものです。(おまえは彼のかかとをねらう) 不義の秘義は、〈慈しみの秘義〉によって追いつまわれます。実際、私たちが罪の本質そのものを洞察し、その暗い秘義の何ものかを理解することができるのは、明らかに十字架の犠牲のおかげです。聖パウロはローマ人への手紙の中で、独特のやり方で私たちを導いてくれます。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とせられたように、一人の従順によって多くが義とされた。」(ローマ 5・19) 「一人の正義のわざによって命を与える義もすべての人に及んだ。」(同 5・18)

〈原福音〉の中では、ある意味で、キリストは「新しいアダム」として初めて告げられています。(コリント①15・45 参照) 実に、罪に対するキリストの勝利は、「十字架上の死に至るまでの従順」を通して得られたものです。(フィリッピ 2・8 参照) 最初の罪と全人類のすべての罪との測り知れない悪に打ち勝つには、いかに沢山の赦しと救いの恩寵が必要であるかを暗に示しています。聖パウロは次のように書いています。「一人の罪によって多くの人が死んだとしても、神の恩寵とこのただ一人の人イエズス・キリストの恩寵による賜は、多くの人々にあふれるばかりに注がれたからである。」(ローマ 5・15)

専ら〈原福音〉の土台の上に立つなら、墮落した人間の運命に関して将来の贖いの見通しが、すでに提出されていることも分かります。

創造の朝の輝きに入る

創世の書第 3 章に含まれている人間の罪に対する主なる神の応答を読むと、そもそもの初めから神は限りなく義であり、同時に限りなく慈しみ深い方として理解することができます。神は「御独り子を与えたもうほどこの世を愛された」方として、「み子を私たちの罪の贖いのために遣わされた」方として、「御自分のみ子を惜しまずに、私たちすべてのために渡された」方として、まさにこの最初の宣言から明らかにされています。

(ヨハネ 3・16、ヨハネ①4・10、ローマ 8・32)

こうして卓越した神聖さにおいて、罪を嫌悪なさる神は、罪人を正当に罰されることもあります。しかし同時に、得も言われぬ慈しみ深さで罪人を救いの愛の中に抱きしめてくださることも私たちは確信しています。〈原福音〉は、この悪に対する善の救いの勝利を告げていますが、十字架に付けられそして復活されたキリストの過越の秘義を通してはじめて福音の中に明示されるのでした。

注意しなければならないのは、創世の書 3 章 15 節「私は敵対を置く」という言葉の中で

「おまえと女との間」とまず最初に女がその場に据えられたということです。「おまえと男との間」ではなく、「女との間」であることがはっきりしています。初期の頃から解釈してきた人は、ここに重要な対照があることを強調しています。創世の書 3 章 4 節によれば、サタン（昔の蛇）は最初に女に話しかけ、女を通して勝利を得ました。時が来て、神なる主は贖い主を告げるに当たって、女を闇の王の最初の〈敵〉とされました。ある意味で女は、悪の権力が御子（女のすえ）である救世主に征服されるという明確な契約の、最初に恩寵を受ける者になるのです。

契約の歴史の中では、神がまず男（ノア、アブラハム、モーゼ）に語りかけられたことを記憶しているならば、このことは一重ねて申しますが一きわめて意味深い事柄です。この場合には女の方が優位を占めているように見えますが、キリストが女のすえであることを考えれば当然なことです。実際、教会の多くの教父や博士たちは、〈原福音〉で告げられた女の中にキリストの御母マリアを見ています。聖母マリアはキリストによって勝ちとられた罪に対する勝利を最初に共有した方です。聖伝と共にトリエントの公会議で強調されたように、聖母は実際に、原罪も他の全ての罪も免れています。そして特に原罪に関しては、ピオ九世教皇が無原罪の御宿りの秘義を表明し、厳粛に定義しました。（『カトリック教会文書資料集』 DS 1516, 2803 参照）

〈かなりの数の教父たち〉がその説教の中で、キリストの母マリアを新しいエバとして示している（それはちょうど聖パウロによってキリストが新しいアダムとして示されたように）と第二バチカン公会議は述べています。（『教会憲章』 56） マリアは新しいエバとなりましたが、〈生きるすべての人々の母〉でありながら アダムと共に全世界の罪への墮落の原因となったエバとは反対にマリアはその従順によってキリストの贖罪に協力し、〈救いの原因〉となりました。（Irenaeus

Adv. Haeresses, II, 22, 4 参照）

この教義について公会議は、みごとに統合していますが、救世主の到来を待つ昔ながらの信仰と希望と光を発展させて来たこの罪に関するカテケージスを、最もよく裏付けるものとして役立つテキストをここに引用するにとどめましょう。

「あわれみの父は、女が死への役割を持ったと同様に女が生命への役割を持つようにと、母として予定された婦人の承諾が受肉に先立つことを望まれた。このことは、全てを一新する生命そのものを世に与え、これほどの任務にふさわしいたまものを神からいただいたイエズスの母に、最も卓越した意味であてはめることである。従って聖なる教父の間で、神の母があたかも聖霊によってつくられ、新しい被造物に形成された者として、全く聖なる者、あらゆる罪の汚れを免れた者と呼ぶ習慣が広まったのも、少しも不思議ではない。ご自分の御宿りの最初の瞬間から全く特別な聖性の輝きをもって飾られたナザレトの処女は、神の命によって告げる天使から『恩恵満ちみてる者』というあいさつを受け、みずからは天の使いに『わたしは主のはしためです、おことばのとおりになりますように』と答えた。こうしてアダムの娘であるマリアは神のことばに同意してイエズスの母となり、心から、いかなる罪にもひきとめられることなしに、神の救済の聖旨を受諾し、子のもとで子とともに、全能の神の恩恵によって、贖いの秘義に仕えるために、自分の主のはしため

として子とその働きに完全に捧げられたのである。」（『教会憲章』56）

こうしてマリアの内に、マリアを通して、人類の立場とこの世の立場は逆転したのです。あたかも、創造の朝の輝きに再び入るかのように。